

ICU Yearbook

YEARBOOK 2023

Email: icuyearbook2023@gmail.com
ig: @icu_yearbook

大特集 みんなのイヤブ物語 : p.02

小特集 被災地で生きる : p.06

臨時総会のご案内 : p.12

入学から71年目 1期生が同期会開催 : p.13

Think globally, act locally. 堀内佳美さん : p.14

A_People 手塚一郎さん : p.18

From the University : p.19

ALUMNI NEWS

INTERNATIONAL
CHRISTIAN UNIVERSITY

ICU ALUMNI
ASSOCIATION
3-10-2, Osawa
Mitaka-shi, Tokyo 181-8585

TEL&FAX : 0422 33 3320
<https://www.icualumni.com/>
E-mail : aaoffice@icualumni.com

ALUMNI NEWS
VOL.141 SEPT.2024





大特集

みんなのイヤブ物語

ディッフェンドルファー記念館西棟にある現在の
ICU Yearbook委員会の部室

年に一度のICU祭、Freshmanのクラスメイト、Seniorの卒業写真、寮対抗スポーツ大会、授業の合間のバカ山でのひと時…。掛け替えのない学生生活を記憶だけではなく写真という記録で残すイヤブ（Yearbook）。

そのYearbookが2024年の今、製作を続けるのが危うくなってきているとの相談が、現役生から同窓会にあった。本特集では、ICUのYearbookの未来を占うべく、44年前の1980年の初代Yearbook編集委員長たちと現役学生のYearbook委員会メンバーとに、それぞれ取材をした。時代も人も移ろい変わりゆく中で、ICUのYearbookが担うものを考えたい。

ICU Yearbookの黎明

文：川島美菜（本誌） 写真：川島美菜・磯島 大（本誌）

同窓生の皆様、お手元にYearbookはお持ちでしょうか？

国際基督教大学（ICU）のYearbookは、学生団体のYearbook委員会が製作している。Yearbook委員会は写真の撮影から、誌面の企画・レイアウト、印刷所の選定、販売、在庫管理までを担っている。

1953年に建学されたICUのYearbookは1980年3月に刊行が始まった。以来、Yearbookは1年も欠かすことなく2024年3月まで毎年発行され続けている。後に、2004年9月に一期生も卒業後にYearbookを刊行した。

6月16日、1980年のYearbookの刊行にあたり、Yearbook委員会を設立し、初代共同編集長を務めた3人のうち2人、佐柳理久さん（23 ID79）と庄司良さん（24 ID80）にアラムナイラウンジでお話を聞くことができた。

同窓会事務局の協力のもと、Yearbookのバックナンバーも広げながらのお話となった。

——1980年3月のYearbook刊行に至った経緯を教えてください。

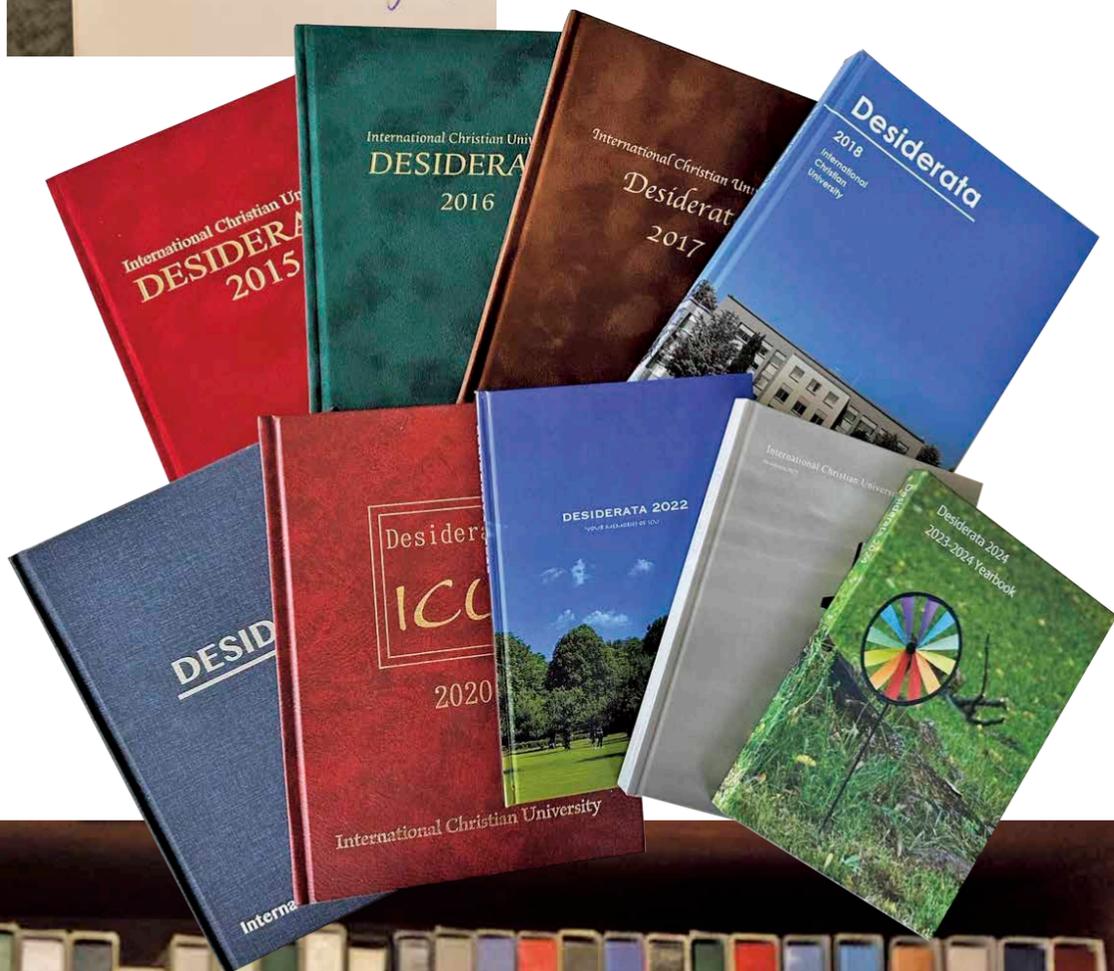
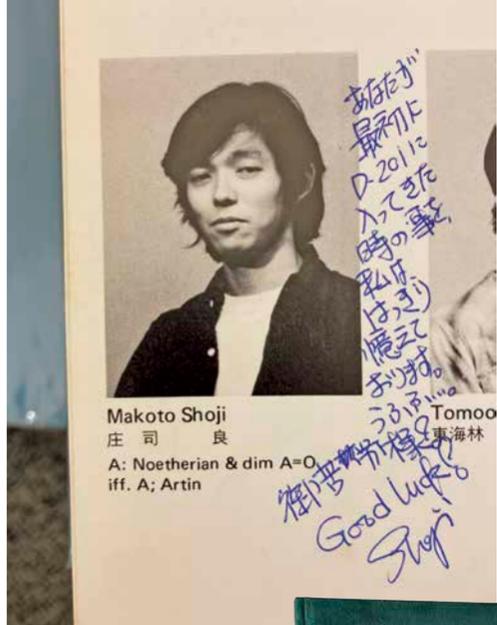
佐柳：初代共同編集長となった中野俊明さん（24 ID80）、庄司良さん、私

（佐柳理久）の3人が出会ってICUのYearbookが始まりました。今回この取材に際して旧交を温めたいと思ったのですが、中野さんは8年ほど前に鬼籍に入られていました。残念です。私はトランスファーのセプテンバーで、NSでICUに入学しました。もともと私は転入前のアメリカの学校でもYearbookの製作をしていて、毎日カメラを持って通学していたんです。ICUでは79年卒業のNSの先輩方が独自に卒業アルバムを作っていました。私はICUコミュニティの中ではマイノリティだったので、世界を広げた

いと思ってD館に行った時に、庄司さんと中野さんと出会い、2人と話して、ICUでもYearbookを作りたいね、となりました。

——Yearbookは、部やサークルではなく今は委員会を名乗っています。どのような構想で始まったのでしょうか？

庄司：最初はYearbook編集局と名乗りました。ゆくゆくは大学の組織に取り込まれてもいいようにというのがアイデア。顧問の先生が学部長だったこともあり、大学との話もうまくいったんです。委員会でも良かったんだけ



上左：Yearbook初代共同編集長。1980年Yearbookから
 上中央：佐柳さんの1980年Yearbookの書き込み
 上右：立ち上げ時に参考の一つになった佐柳さんがアメリカで通っていた学校のYearbook
 右・下：歴代1980～2024年までのICU Yearbook



ど、ICU祭実行委員会や照明委員会など、すでにある組織と差別化しなかったのです。

佐柳：初年度のYearbook編集局は声をかけて集めたら30人くらいになったのだけど、その中でもセプテンバーの学生が比較的多かったです。製作にあたっては各自の高校時代などのYearbookを持ち寄って参考にしました。当時は得意なことを得意な人がやる体制。会計係や古期英語（Old English）が書ける人。写真の撮影はカメラを持っている人たちが自分のカメラを持ってきて撮影していました。

共同編集長の3人も、対外的なことは庄司さん、学生を集めるのを中野さん、撮影が私。この構想のおかげが学生時代に事業の立ち上げをしたような経験ができました。

——タイトル「DESIDERATA」は最新号の2024年3月まで続いています。このタイトルが選ばれたのはなぜですか。

庄司：公募です。全学生からアンケートを取りました。

佐柳：DESIDERATAを挙げたのはたしか当時の留学生だったと思います。マックス・アーマンの詩です。1980

年の初代Yearbookではページに詩を散りばめてレイアウトしました。

——1980年のYearbook製作時の思い出をお聞かせください。

庄司：印刷所は相見積もりを取って決めました。誌面にはいろいろ書込みをしてもらえるよう書きやすい紙にと、紙の質にもこだわりました。落選した印刷所の紙はボールペンのインクが乗りにくい紙だったんですよ。

——卒業から45年となります。今までとこれからのYearbookへの思いはありますか。

庄司：何年か前に周年記念でアラムナ

イハウスに集まったことがありました。（Yearbookのバックナンバーをめくりながら）2010年のYearbookに写真が載ってるから2009年のことでしたね。Yearbook30年で集まったんです。また周年の時に集まってもよいかもしれないですね。



そして、Yearbookの現在地

文：磯島 大(本誌)

続いて、創刊から45年を経たYearbookの現在地を訪ねてみたい。

物理的な現在地としてのYearbook委員会の部室は、新D館(ディッフェンドルファー記念館 西棟)の4階だが、この時代らしくメンバーによる会議などはオンラインで行われることが多いのだそう。

今回の記事化にあたって、Zoomによるオンラインミーティングで現役Yearbook委員会のお二人、齋藤華さん(ID26)と山田賢人さん(同)から、Yearbookの現在地(今)についてお話を伺うことができた。

存続の危機

ICUのYearbookは今まさに存続の危機とも言える岐路に立たされているという。

ひとつには、販売部数が激減していて採算がとれなくなっている点。もうひとつは担い手不足である。

今年の3月に発行されたYearbook 2024はインタビュー時点(2024年6月)で実売30部とのことである。印刷部数は120部。完売すれば原価がまかなえるギリギリの水準で販売しているので実際のところ大赤字だ。

ちなみに、筆者はID90で当時学生

時代にYearbookに所属していたが、当時の販売部数は400部程度、それでも潤沢に利益が出るわけではなくトントンという感じだった。

一方、担い手、つまり部員数も少なくなっている。今年は微増で20人ほどだが、3年生は就職活動や留学で活動することが難しいため、実質的には1-2年生10人ほどでがんばるしかない状況とのこと。4年生はというと昨今はほとんど大学に来ないという。

人数が少ないので作業がこなせないというだけでなく、先輩から後輩に技術やノウハウが継承できていないという問題も発生しているそうだ。

ちなみに、90年ごろはよく働く人もそうでない人も含めてではあるものの100人くらいメンバーがいたし、上級生から下級生までわりとみな部室に出入りしていて、暗黙知形式知ともわりと自然なかたちで継承されていたように思う。

イマドキの学生事情

ここに至る経緯にはいろいろな要因があるようだ。インタビューでは、トレンドのひとつとしては、学生時代の記録としての写真の位置付けの変化が指摘された。年に一度の紙のアルバム

に依らずとも、スマホでいつでも大量に高精細の写真が残せるようになったことも大きいのではないかと。わざわざ写真集を買わなくてもよくなっているのだ。なぜYearbookを買うのか、なぜYearbookの編集に関わるのか、という両方の側面に関わってきそうだ。

また、世の大学生、ICU生をとりまく環境の変化も大きな影響を与えているらしい。まず、3年生の5月ごろには夏のインターンシーズンとなり、サークル活動どころではなくなる。そして、場合によっては就職活動が4年生の6月くらいまで続くこともめずらしくないという。ICU生の場合これに加えて3年生の多くが秋ごろに留学するため、学校にも来られなくなるそうで、実質的に戦力は1-2年生だけになってしまっているというのだ。

そして、コロナ禍の影響も当然無視できない。そもそもキャンパスに通えない期間が長く続き、サークル活動が制限された上、撮影会などの実施が難しいことなどもあり、Yearbook自体もひとまわり小さくなってしまったそう。

現役メンバーによる改革

ここまで少々話が暗くなってしまうが、もちろん光明もある。

今回インタビューに応じてくれたお

二人が、Yearbook再興に向けて努力を続けている。そのひとつがマニュアル化の推進だ。対面で技術やノウハウを伝える機会が減った中でも新人がすぐにやりたい作業ができるように工夫をこらしているという。製作を企画して、写真撮影、取材、編集、グラフィックデータの加工、印刷会社との折衝など盛りだくさんの作業を、やらなければならない作業ではなく、楽しい作業にしていこうというのだ。

山田さん曰く「大変だけど達成感があって、純粋に楽しいです!」、齋藤さんは「先生の下ではなく自分たちの自主性で作り上げるのは素敵な経験だし、0(ゼロ)からみんなで作るのはとても楽しい」と。楽しんでいる人がやっている活動は強いはず。そして、さらにうれしい話として今年の1年生(ID28)たちがとても元気なのだと語ってくれた。

外部環境の変化も?

就職活動のタイミングというのは難しい要因ではあるものの、昨年4月に就職問題懇談会が全ての大学等が留意すべき点をまとめた「令和6年度大学、短期大学及び高等専門学校卒業・修了予定者に係る就職について(申合せ)」を策定し、これに基づいて政府からも経済団体・業界団体等の長(1,267団体)に対し、就職・採用活動時期等を



遵守するよう要請が行われている。さらに、同年10月には東大が「2024年度本学卒業・修了予定者の就職・採用活動について」という声明を出している。その中で、就職・採用活動のスケジュールは、広報活動開始：2024年3月1日以降、採用選考活動開始：2024年6月1日以降、正式内定日：2024年10月1日以降と謳われている。また、採用選考活動開始時期より前に採用の内々定を出すことも学生の学修環境に強い影響を及ぼすこととなるので、実施しないこと、とも。

貴重な大学生生活の期間に勉学はもとよりサークル活動を含めた活動が大人の勝手な都合で阻害されることのないように変わってほしいと切に願うところである。

YearbookのValue

もうひとつ、イマドキそもそも紙のアルバムが要るのか？という問いについても、これからのYearbookの姿の模索も続けられている。SNSや流行のアプリによる写真のシェアは、どちらかというとその時々のフラッシュの側面が強いが、アルバムは後で開いた時に当時の思い出が詰まった宝箱になっているかもしれない。そう、どんなYearbookを目指しているかという質問に対する、「学生生活をブワッと思い出せるような本にしたい」という齋

藤さんの言葉がとても印象に残った。

実際、筆者もインタビューのあと、長らく開くことがなかったYearbookを掘り出してきて眺めてみて、確かに学生生活がブワッと迫ってきた気がした。もしかしたら卒業して何年も、あるいは何十年も経ってから意義が高まるものだったりするのかもしれない。

さらに、卒業時のものには友達や先輩による書き込みがたくさんあって、一人ひとりの顔や声が昨日のことに浮かんできた。

初代共同編集長の佐柳さんと庄司さんのインタビューの時に、書き込みができるようにレイアウトを工夫した、書き込みしやすい用紙を選んだというお話があったが、マジックやボールペンで書かれた直筆のメッセージは、紙のアルバムが価値を発揮するおまじないなのかも。このあたりは、最近の学生やこれからの学生たちにとっても同じなのか、そうでないのか、同じ価値が感じられる存在としてYearbookが続いていくのかどうか。個人的には次世代のYearbookが新しい価値を作りながら続いてほしいと思う。

(謝辞：齋藤華さんと山田賢人さん取材協力ありがとうございました)

在学時代のYearbookを手に入れてみませんか？

これまでは在学中でないと手に入れる機会がなかったYearbookですが、今年6月から新たな試みとしてバックナンバーの販売が始まっている。

まずは過去10年分の様子を見るところからスタートして、今後より以前のものに広げていく予定とのこと。詳しい申込み方法などは同窓会のウェブサイトに掲載されるのでチェックしてみてください。

なお、当時のYearbookはどんなだったのか？が気になる方は、アラムナイハウスの書棚にバックナンバーがあるので手にとってみることもできる。今春のホームカミングの時にはテーブルにバックナンバーを展示し大変好評だったという。今後ICU祭や同窓会のイベントでも展示、販売などを企画していこうという話も出ている。

(バックナンバーのオンライン販売やリアルイベントでの展示、販売については、同窓会メルマガでも告知予定)

イヤブックtips

- 毎年3月に刊行
- 卒業アルバムではなくイヤブック
- 年ごとにページのレイアウトが少しずつ変化してきている
- 初期のイヤブックは表紙や裏表紙に名前が入っている
- 2021年にサイズが小さくなった
- 写真以外にインタビューが載っている年もある
- 2024年6月にバックナンバーの販売を実施。詳細は6月21日配信ICU同窓会メルマガvol.6告知のとおり。バックナンバーの購入利益は今後の活動に活用されている。

小特集

被災地で生きる ～災害を乗り越え活動する同窓生

地震や豪雨など日本各地を見舞う災害。ハード面の復興が目ざされがちだが、「食」や「芸術」などの分野で被災地・被災者を支えようとする同窓生もいる。Weekly GIANTS編集部が、今年1月の能登半島沖地震で被災した北崎裕さんと、2011年3月の東日本大震災支援に関わった下館和巳さんに思いや体験などを聞いた。



左から：北崎裕さん (Mitsue Nagase) / 杣徑 Instagramより (イラスト：小池アミイゴ、Instagram <https://www.instagram.com/amigosairplane/>) / 「杣徑」改装中の店舗 (北崎さん提供) / 北崎さんと取材した2人

能登が誇る食と人のつながりを生かしたい

文：高田心音 (ID27)・安田菜々 (ID27) 写真：クレジット以外、高田心音・安田菜々

器と日本料理

北崎裕さん (40 ID96、美術史専攻) がICU卒業後、最初に料理人として働いたのは京都市の店だった。そこで、陶器や茶道や日本料理の歴史を学び、日本料理は、器や文化、お茶、土地や街の歴史など、様々なものが融合して一つの作品として完成していることに気が付いたという。その後、5年間勤めた京都の店を離れ、金沢市の日本料理屋で修行し、30代になってから自分で店をもつことができた。日本料理は日本料理だけで存在することはできない。器がメッセージを発信し、「作品」として完成するということを教えてくれたという。

昨年7月には、石川県輪島市内の山間にある古民家で塗師の赤木明登さんと共に日本料理と宿泊を提供する施設「茶寮杣徑」をオープンし、同時に輪島塗の器を使用した料理の提供を始めた。輪島塗は輪島市の伝統的な漆器で、主に赤や黒で塗られ、なめらかさが特徴だ。今では豪華な装飾のイメージがある輪島塗だが、赤木さんの塗りものは、装飾性を排した、形、色、テクスチャーだけの器だ。日本料理の世界でこれまで主流であった絵柄などで季節を表現する器とは違っていたが、だからこそ、あえて輪島の海山で、その場所からそのときに採れたものを料理することを通して表現することがで

きたそうだ。

北崎さんは輪島塗が分業制で作られていると語る。一つの輪島塗を作成する工程には、様々な人が関わっている。木地を作る木地師、漆器のきめ細やかな肌ざわりを作るために下地を担当する人、中塗り・上塗りという塗料の工程を担当する塗師、装飾を行う「加飾」を担当する人など、様々な工程を経てひとつの輪島塗は完成する。「一人も欠けてはいけない」と北崎さんは強調する。

地震で再確認した地元の絆

輪島市内に店を出してから半年後の2024年1月1日、能登半島を大きな地震が襲った。幸いにも北崎さんは12月の末に店を閉め、金沢の家に帰っていたため、自身が大きな被害を受けることはなかった。しかし、翌日に輪島に行くと、店は傾き、陶器は3割、ガラス製の器は多数破損してしまっていた。2月には金沢で、無事だった器を使用して、レストランの仮営業を始めた。現在は能登で仮店舗「食堂 海辺の杣徑」の9月営業再開に向けて動いている。

輪島塗の分業制と同じように、日本料理も食材を作る農家や作った料理を食べるお客さんがいなければ存在できないと北崎さんは語る。被災地で炊き出しをした際、能登の地面が隆起し、仕入れルートの確保が困難になって今

まで通りとはいかなくなった。その際に地元の人たちと話すことができ、人とのつながりの濃さを実感したと言う。

能登の食と魅力をつなぎ、広げる

現在、能登地域の人たちは食べるものに困ることはなくなってきているが、北崎さんは「前向きに何かを作って食べて生きようという気持ちになれるようなもの、特に能登の地元の食べ物を得る機会が足りない」と感じている。そのような状況を見て、自分のレストランで、能登の魅力のある食材を積極的に使い、多くの人に能登の魅力を広げていこうと思うようになった。また、自身のレストランを地域の人たちとコミュニケーションの中心に位置づけていくことで、地域コミュニティの活性化にも貢献したいと語る。農家として一次産業に携わる人達はひたすら土と向き合って野菜などを作っている。だから中々自分たちの生

産物に対してお客さんから「美味しかった」などと直接フィードバックをもらえる機会は少ない。しかし、レストランで使われて高い評価を得ることで生産者も嬉しく感じる。このようにレストランが地域をつなぐ場所になっている。北崎さんは今回の震災が「終わった話になるのは困る」といい、実際に足を運んで、能登を感じて、能登で消費をするなど、なにかしらの関わりをもつことが大切だと語った。

今回の取材を通じて、私たちが周りの人たちとのネットワークの中で生きていることを実感した。残念ながら今回は北崎さんの料理をいただくことはできなかったが、いつか、その季節の地元でしかとれない食材を使い、器にも同じようにこだわった料理を見て味わってみたい。そうしたら、輪島塗のように自然と人とのつながりの中で動いている能登の魅力をもっと感じることができそうな気がしている。

「海辺の杣徑」

2024年9月3日(火) 新装開店

場所：石川県輪島市門前町鹿磯 1-17

電話：090-4605-3737

ランチ営業：11時～15時 月火休

ディナー営業：18時～19時30分 入店 (要予約)

Instagram：https://www.instagram.com/_somamichi/



下館和巳さん

左上:「新ロミオとジュリエット」(山元町、2012) / 右上:「アイヌオセロ」(エジンバラ、2000) / 下:「恐山のマクベス」(ロンドン、2019)

東北弁シェイクスピア作品で被災者に寄りそう～東日本大震災

文: 安田菜々 (ID27)

下館和巳さん(22 ID78)は宮城県塩釜市出身。東北学院大学教授を昨年引退した。1992年に東北弁で上演するシェイクスピアカンパニーを設立。修士課程、博士課程も含めICUには計11年在籍し、キャンパスは「実家みたいな」存在だと言う。

下館さんは塩釜の海産物屋の家に生まれた。「海っぺりと山っぺりで違う」「父方の南部弁と母方の宮城弁」といった多様な方言に触れて育つ。ICU在学時代はインカレの演劇部に所属。最初は役者をやっていたが東北弁のアクセントを直されるのが嫌になったのと、脚本を書く方が向いていると思い、後に脚本を主に担当するようになる。

東北弁のシェイクスピア

東北弁は戊辰戦争での敗北が影響して「馬鹿にされてきた言語」と下館さんは話す。そんな東北弁に光を当て、シェイクスピアカンパニーでは作品は全て東北弁で上演してきた。2011年東日本大震災が起き、恩返しをしようと被災地での公演を始めた。ミニバンを自ら運転し、三陸海岸の北から南まで無料で「ロミオとジュリエット」を公演して回った。震災後三陸に沢山のボランティアが来たが、三陸の人々は標準語を話す人に対し警戒心を持っていたという。しかし、自分たちが喋る東北弁で上演される舞台を観て三陸の

人たちは泣いて喜んでくれた。被災地のおばあちゃんに「全部わかったよ、心にしみた」と言われ初めて、公演をやってよかったと思った。

大量生産ではない言葉が持つ力

作品を方言にする時、直訳するのではなく翻訳する。「翻訳」とはその言葉の背景の魂をつかむこと。「死なねえで、生きて」。カンパニーオリジナルの「ロミオとジュリエット」の作中にジュリエットがロミオに言うこんなセリフがある。「愛してる」は歯がうくけれどこの「死なねえで」は東北の愛してるじゃないかな。対面で行う演劇はメディアで伝えられる大量生産された言葉とは異なり、そのお芝居は言葉の力を持つ。文学の力は広く、深い。

助け合う気持ちが力になる

地震でわかったのは「助け合うという気持ちがあれば人間は生き続けられる」ということ。ボランティアや支援物資を送るといった「具体的な力」でなくても「人間が人間のために遠くの人の苦しみや悲しみを自分のことのように感じる」そんな気持ちが集積して力になるのではないかと。現在シェイクスピアの「冬物語」を制作中だ。なぜならそれは再生の話であり生きると言う話だから。みんなそれぞれ会いたい人がいるからね、と話す。

「シェイクスピア・カンパニー」

仙台を拠点とし、シェイクスピア劇を東北弁で演じる劇団。11月22-24日に多賀城市文化センターで原作「冬物語」を昔の東北に置き換えた「みちのおくの国の冬物語」上演する。

<https://www.shakespeare-company.net>

DAY賞 受賞者 同窓生へのメッセージ

2024年 第19回 DAY賞を受賞した3人のメッセージをお届けします。

写真：吉富祐一



吉川元偉氏

(18 ID74 社会科学科、1974年3月卒業)
国際基督教大学特別招聘教授、元国連大使
YOSHIKAWA, Motohide
(CLA18, ID74, Social Science)

元外交官。ICUでは「外交官になって平和に貢献したい」との強い思いから、国際法を勉強し、1974年に外務省に入省。スペイン留学ののち、アルゼンチン、英国、フランス、タイ、米国等での勤務を経て2006年にスペイン大使に就任。その後も初代アフガニスタン・パキスタン支援担当大使、経済協力開発機構(OECD)代表部大使、国連大使・常駐代表などの要職を務めたのち、2016年に外務省を退官。翌年からは、ICUの特別招聘教授を務めつつ、外交官や国際公務員を目指す学生の育成に尽力している。スペイン、アルゼンチン、モロッコ、モンゴルより叙勲され、英語の他、スペイン語、フランス語も堪能。

Professor Yoshikawa: An ex-diplomat. With a strong desire to become a diplomat and contribute to the peace, he studied International Law at ICU and joined the Ministry of Foreign Affairs in 1974. After having studied Spanish in Spain and worked in Argentina, the UK, France, Thailand, the US, he was appointed as Ambassador to Spain in 2006. Later, he held various important ambassadorship such as the first Special Representative for Afghanistan and Pakistan, Ambassador to the Organization for Economic Co-operation and Development (OECD) in Paris, and Ambassador/Permanent Representative to the United Nations in 2013. After retiring from the Ministry of Foreign Affairs in 2016, he has been serving as Distinguished Professor at ICU from 2017. At ICU, he has been helping those students who aim for careers as diplomats or international civil servants. He received decorations from Spain, Argentina, Morocco and Mongolia. He is fluent in English, Spanish and French.

DAY賞をいただき光栄に思います。私は、1974年にICUを卒業後直ちに外務省に入省し、2016年に退官後2017年からICUに奉職しています。自分の人生を振り返ると、高校で1年先輩だった末吉高明さん(16 ID72)に会ってなかったら、多分ICUには来てなかったと思いますし、外交官を目指すこともなかったかも知れません。

奈良県立畷傍高校に入学したときESSの部長であった末吉さんから、AFS留学制度やICUのことを初めて聞きました。末吉さんは、目標通りAFS奨学生としてアメリカに行き、帰国後はICUに進学しました。私は彼の後を追ってアメリカに留学しICUに進みました。現在四国学院大学学長である末吉高明さんに感謝しています。

アメリカ留学は、自分の将来について考える機会になりました。帰国する頃には、外交官になろうとの気持ちが強くなっていましたし、ICUに進学することはすでに決めていました。

ICUでは、授業のほか、カナダハウスでの寮生活、柔道部、家庭教師のアルバイトなど充実した学生生活でした。授業は新鮮で楽しかったです。緒方貞子、横田洋三、Carl Kreider、福地崇生、細谷千博など多くの先生(全員故人)と卒業後も親交を続けられたことは幸運でした。幸い4年生の夏に外交官試験に合格できました。

私は、父親が4年間の兵隊生活と4年間のシベリア抑留という辛い体験をしたこともあったので、「戦争と平和」に関心がありました。42年間の外交官生活のうち、15年間を東京で27年間を外国で過ごしました。その間、中東アフリカ局長、スペイン大使、アフガニスタン・パキスタン担当大使、OECD代表部大使、国連代表部大使・常駐代表などを歴任し、多くのポストで「戦争と平和」の問題に直面しました。課長時代に自衛隊のカンボジア国連PKO派遣を担当したこと、「9.11」後のアフガニスタン復興に長らく関与



したこと、局長時代に自衛隊のイラク派遣を担当したこと、国連大使時代には安保理理事国選挙に当選したことや地球温暖化に関するパリ協定に署名したことなどが思い出に残ります。世界各地に生涯の友人が出来たことも嬉しいことです。

外交官の仕事は、家族の協力なしには出来ません。多くの引越しと転校を我慢した妻と息子たちに感謝しています。

ICUで教員を始めて7年になりました。私の目標は、「学生時代にこういう授業があれば取りたかった」と思うような授業を行うことです。毎年、一般教養科目の「国際関係とディベート」(日本語)、専門科目の「国連・国際機構論」(英語)、大学院の「外交と国際関係」(英語)を開講しています。ICU生は多様な才能を持ち、教えられることが少なくないです。卒論指導もしていますが、国家公務員などpublic serviceに進む卒論ゼミ生が多いことに力づけられています。私の古巣外務省に在職する卒業生は近年大変増えました。

かつて国連で働く日本人職員の多くがICU卒業生だった時期がありました。ICUでは、6年前から外交・国際機関を目指す学生向けの特別プログラム(通称DIPS)を始めました。私も委員の一員として支援しており、ICUでの恩師、緒方貞子先生がお亡くなりになった2019年以来、「緒方先生の遺されたもの」というテーマで毎年12月にシンポジウムを行なっています。緒方先生に続き国際舞台で活躍する人材を多く輩出したいです。

In 1974, after graduating from ICU, I joined the Japanese Diplomatic Service. I have been teaching at ICU since 2017, after my retirement from the Service in 2016.

I would not have come to ICU if I did not meet a friend when I was 15 years old. This friend is called

Takaaki Sueyoshi(Class of 1973) who went to USA by an AFS scholarship and later went to study at ICU. I followed in his footsteps to go to the States and to ICU. Mr. Sueyoshi is now President of Shikoku Gakuin University.

My school life at ICU was very enjoyable. I met many teachers, including Mrs. Sadako Ogata, with whom I continued contact for many years. While still at ICU, I could pass the Diplomatic Service Examination.

I was always interested in issues related to “War and Peace”. It was partly because my late father had spent a very difficult time as a soldier for 4 years and as a prisoner in Soviet Siberia for 4 years. In my 42-year diplomatic career, I was given many interesting posts, such as Ambassador of Japan to Spain, Special Representative for Afghanistan and Pakistan, Ambassador to the OECD and finally Ambassador to the United Nations. During my entire career, the issues related to “War and Peace” were always in my mind.

At ICU, I have been teaching classes related to International Relations and the UN. My objective has been to motivate students to seek a career in public service such as diplomacy or international civil service. The ICU students today come from diverse backgrounds and their academic level is high.



八田陽子氏

(19 ID75 語学科、1976年3月卒業)
味の素株式会社、広栄化学株式会社、および日本製紙株式会社社外取締役。小林製薬株式会社社外監査役。ICU評議員。
HATTA, Yoko (CLA19, ID75, Language)

ICUでは語学を専攻。卒業後、子育てをしながら米国公認会計士の資格を取得し、1988年にPeat Marwick Main & Co. (現KPMG LLP NY) に入社。主に日本企業の米国子会社向けに「米国の税務」サポートを行った。2002年に帰国後は、ピーターマリック税理士法人 (現KPMG税理士法人) のパートナーとして主に価格移転問題を担当した。NY在住時はICU同窓会北米支部長。2023年5月まで学校法人国際基督教大学の監事を15年間務め、現在も学校法人評議員や同窓会の監事を務めるなど母校への直接的貢献を続けている。

Independent Outside Director for Ajinomoto Co., Inc., Koei Chemical Co., Ltd., Nippon Paper Industries Co., Ltd., Outside Audit and Supervisory Board Member of Kobayashi Pharmaceutical Co., Ltd. At ICU, she majored in Language. After graduating and spending time as a family person, she joined KPMG LLP in New York in 1988 where she provided tax services mainly for US based subsidiaries of Japanese firms. When she returned as a partner of KPMG Japan, she mainly supported tax issues in the transfer pricing area. She Contributed to ICU as Chairperson of ICU Alumni Association in the Americas during her stay in NY.

She served as Auditor of ICU for 15 years until May 2023. She is continuing serving as a Councilor of ICU and Councilor of ICU Alumni Association.

ICU時代の八田を知っている人は卒業後の私に大きな違和感を覚えているのではないかと思います。なぜ仕事をするようになったかを少しお話しします。ICUを卒業して4か月後に結婚し、翌月には主人の都合でアメリカに渡りました。そこでは、主人の同僚の奥さま達が皆仕事を持っていて女性が仕事をする環境が整っているようでした。そこで私も、何もすることもないため仕事をしようと思いました。外国人というハンディを持っているため会計士の資格を取ることにしました。子育てを優先し、数年かけて会計の単位を毎学期原則1コース分ずつ取得するという形で受験資格を得て米国公認会計士の試験を受け、36歳でNYのKPMGという会計事務所に就職しました。当時は米国への日本企業の進出が盛んであり、日本語ができたこと、グリーンカードを持っていたこと、会計士の資格を持っていたこと、等が八大会計事務所のうち2社から即Offerがあり、決まった後、別の1社から考え直してくれと言われた理由かと思っています。また入社に年齢制限が全くない米国であったことも影響していると思います。KPMGでは日本企業の米国支社、支店の税務を担当し、税務相談、税務申告、税務調査、等々合計11年間たくさんの会社のお手伝いをしました。クライアントにもいろいろ教えていただいたのですが、ICUで培われた、必要と思った際には相手の立場に立って、必ず理解してもらえようという助言をするという姿勢が役に立ったと思っています。そのせいか、クライアントからは「困ったときの八田だのみ」という言い方が何社かの間で共有されていたようです。その後2002年に日本のKPMG税理士法人に移り、主に「移転価格」問題という国際間の課税権の争いにつわる税務問題を担当しました。

卒業後ICUとはあまり接点がなかったのですが、NY時代には同窓会で北米支部長であられたクリス和田さん(4 ID60、卒業時名一和田定実) から、日系企業に大きな影響を与えるカリフォルニアの法律改正を成立させるため、議員を追いかけ、ヘリコプターを飛ばしてご尽力をされた時のお話を伺ったりするなど、支部会はとても楽しい集まりでした。その後、クリス和田さんが急死されてしまい、その後会長を務めてくださったソニーの宮崎貴子さん(24 ID80) の後を引き継ぎ、日本に移るまで支部長を務めました。2002年に日本に移る1年前に起きた911事件では、アラムナイニュースで先日紹介されましたが、同窓会の皆さまに大変お世話になりました。帰国後、会計士ということもあっていますが、ICUの監事を昨年6月まで15年間務めさせていただきました。この間に日本の企業および学校を取り巻く環境は大きく変わり、「ガバナンス」が強化されました。法改正もあり、監事の責任が大変重いものとなるなか、2014年から会計監査に加えて業務監査の一部として教学監査を始めま

した。教学監査は、文科省の指導で少し前からするべきとされておりましたが、あまり導入する大学は多くなく、ICUは私立大学の中では比較的早く取り入れたほうです。大変な作業を伴う監査で、非常勤監事3人の体制で効率よく行うため、いろいろ工夫を重ね、他校から参考にさせて頂きたいと問い合わせもいただきました。いかにICUを持続可能な大学にするか、学生にとって魅力的な大学にするか、そのために監事としてどのような観点からコメントができるかを常に監事3人で相談しながら職務を果たしたつもりです。

現在4社の社外役員をしておりますが、基本的に会社へのアドバイスはICU監事の視点と同じです。どのように会社が成長しようとしているか、そしてどのようなコメントをすることが会社の役に立つかを常に考えています。立場上状況判断をしっかりと行い、幅広い視点から全体を踏まえたコメントを行う、ただ言葉を発するだけではなく実際に何を言ったら何が動くかをしっかり押さえ、物事の本質がどこにあるか、うわべだけではないアドバイスをひるまず付度なしに発言することが要求されます。「的を射たコメントがありがたい」などのお言葉をいただきます。このようなお言葉をいただける土台は、多様性を受け入れ柔軟な考え方をする力を身につけ、何が重要でどうすると解決できるかを考え抜くということICUで身につけることができたからではないかと思っています。素晴らしい環境の中でリベラルアーツの教育を受けることができたICUに感謝しています。

After graduation, I got married and lived in the US. While raising two children, I took one course per semester to become a US CPA and obtained a job at KPMG NY at the age of 36. While at KPMG, I took care of tax matters including tax consultation, tax filing, tax audits, for U.S. branches and subsidiaries of Japanese companies. I learned a lot from my clients, but I believe that the attitude I developed at ICU of always putting myself in the clients' shoes and giving advice in a way that they would understand, was useful. Perhaps because of this, there seemed to be a shared saying among some of my clients, "Hatta is the person to call when you are in trouble". In 2002, I moved to Japan to work for KPMG Tax Corporation, where I mainly handled "transfer pricing" issues, which are tax issues related to international tax disputes.

Attending the meetings of North American Chapter at the ICU Alumni Association, I enjoyed hearing many Senpai's stories. For example, Mr. Chris Wada(Class of 1960), who was the president of the Association, the great experience about the time he chased a con-

gressman and flew him by helicopter to have him vote to make the California law passed that had a great impact on Japanese companies. Before leaving US, there was 911 in 2001 which has been introduced by Alumni Magazine and I was very grateful to all the members of the Alumni Association for the great support they gave to me.

After returning to Japan, I served as ICU's auditor for 15 years until last June. During that time, the environment surrounding Japanese companies and schools has changed dramatically and "governance" has been strengthened. With the revision of the law, the responsibility of auditors has become very heavy, and in 2014, in addition to accounting audits, we started auditing teaching and learning as a part of operational audits. The Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology (MEXT) has been instructing us to conduct audits of teaching and learning for some time then, but not many universities have adopted such audits, and ICU was one of the first private universities to do so. We have devised ways to conduct the audits efficiently by three part-time auditors, which involves a tremendous amount of work.

I am currently an outside director of four companies, and my advice to the companies is basically the same as the ICU auditors' perspective. I am always thinking about how the company is trying to grow and how my comments can help the company. I receive comments such as, "We appreciate your targeted comments". The foundation for receiving such comments is the ability to accept diversity, thinking flexibly, understanding that "one's way of thinking" is diverse, and that people always think through their own channels. Seeing things widely, and thinking through what is important and how it can be resolved from the standpoint of the people involved is the key to provide advice to others. I believe the foundation for receiving such comments is because I was able to accept diversity, thinking flexibly and learned how to think through what is important and how to solve problems from the standpoint of all the people involved at ICU. I hope that you too will have the opportunity to develop your individuality at ICU, where you are blessed with the ability to have your own way of thinking and utilize it for your work in the future.



ウィリアムズ(半田) 郁子氏

(26 ID83 語学科、1982年3月卒業)
英国国教会司祭、聖路加国際病院非常勤
チャプレン、ICU評議員
WILLIAMS (HANDA), Ikuko
(CLA26, ID83, Language)

ICU卒業後、1989年に渡英。リーズに30年居住。2008年に日本人女性として初の英国国教会司祭となり、その後リーズ大学病院でチャプレンを務める。第二次世界大戦の日本軍捕虜収容所で過酷な体験をした元戦争捕虜の英国人との出会いを通じ、戦争の負の歴史に向き合い、人と人が和解することの大切さを身をもって示してきた。2019年帰国後、キリスト教教派間の対話、夫である現ICU副学長マーク・ウィリアムズ氏が推進する日韓学生の交流プロジェクト、ICUの学生・教職員と続けてきた読書会、ICU和解フォーラムと呼んで開催する講演会や夏リトリートなどに携わり、一貫して「和解」を課題とした活動を展開。またICU内の自宅や、教員と卒業生と組んで毎月開く「てばなすペース」と呼ぶオンラインの集まりにて、ICUの伝統でもある学生との対話を続け、多くの学生に寄り添い続けている。

Revd. Ikuko Williams lived in Leeds, UK for 30 years from 1989. In 2008, she was ordained as a priest for in the Church of England, as the first Japanese woman to do so, and later served as a health care chaplain at the University Hospitals of Leeds. Through encounters with former prisoners of war, who were living with trauma-turned-anger from their experiences in Japanese prisoner of war camps during World War II in Southeast Asia, and through the unexpected experience of reconciliation with them, she has been advocating the importance of reconciliation between individuals living with the negative history of war.

Since returning to Japan in 2019, she has consistently promoted activities to encourage discussion on the theme of "reconciliation," such as organizing various book groups, speaker-events and summer retreats under the name of the "ICU Reconciliation Forum", contributing to an exchange project between Japanese and Korean students organized by her husband, current ICU Vice President Mark Williams, and practicing ecumenical Christian ministry. In addition, she continues to offer a listening presence and spiritual support for students, at her home in ICU, which is part of ICU's tradition, and through 'Tebanaspace', a monthly online listening space which she co-runs with a member of faculty and a graduate.

この度、DAY賞のお知らせを受け、非常に困惑しましたが、これまでの道のりでたまたま出会った「和解」というテーマについて、感謝を持って皆さんにお話しさせて頂くことといたしました。

私は、ICUではアメリカから帰国して入学した9月生編入生でした。逆カルチャーショックもある中、「異文化間コミュニケーション」という専攻との貴重な出会いがありました。今思えば、異なった背景や立ち位置によって起きる齟齬の悲しさに目を向け、相互理解への道を探る大切さをICUで学んだと言えます。

後に結婚し、一家でイギリスに移った1989年に出会ったのは、残念ながら、第二次世界大戦中に東南アジアで日本軍捕虜となった英国人たちの日本に対する憎悪と怒りの声でした。その声にショックを受けたものの、実際に彼らが日本軍兵士から受けた残虐行為を聞くにつけ、より深いショックを受け、またそのような自国の行為があったことも知らずにイギリスに来てしまった自分を恥ずかしく思いました。

英国人元捕虜との和解など決してあり得ないと思う中、ある時、元捕虜たちと日本人との英日和解礼拝という場に呼ばれ、加害者側として、日本の国の過去の過ちを初めて言葉にして悔いる祈りを捧げることができました。すると、思いがけない感謝が溢れ、涙が止まらない経験をしました。さらにその礼拝では、元捕虜の方達が和解の印として、私たち日本人に握手を求めてこられたのです。

こんな「とんでもない」和解というものとの出会いを経て、私は英国国教会の牧師となる道へと導かれました。そして、リーズ大学病院チャプレンとなり、病院で会う様々な人たちに寄り添う仕事に従事しながら、機会ある度に英国人元捕虜およびご家族・遺族との和解のために、また交流のために僅かながらですが関わってきました。

そして数年前、夫のマーク(ウィリアムズ、マーク。現ICU国際学術交流副学長)がICUに呼ばれたため再び戻ってきたこのICUで、私はイギリス

での和解の体験を話し、「クワイ河収容所」という、日本軍の捕虜だった一人の英国人の手記の読書会を開いてきました。多くの学生、教職員、さらに同窓生と、この「クワイ河収容所」の読書会は何度も繰り返されています。そして読書会の仲間と共に、「ICU和解フォーラム」という名の下、和解の理解を深め、広める活動が生まれました。多くの学生たちと和解についての読書会を続け、JICUF財団の助成金を受けて数々の講演会イベント、泊まりがけのアジア学院でのリトリートなどを開催してきました。不思議な励ましを感じる進展にただ感謝です。

和解とは「旅である」と言います。道は長く、苦労もあり、新たな出会いもあり、自分も相手も変えられていきます。ICUには「C」という基盤があります。その基盤である「キリスト」は、和解の希望をくださる平和の君です。分断の絶えない世界で、この希望は大事です。この「C」を基盤とする大学で学び、恩恵を受けた私たちには、神と人を愛すため、和解に生きるミッションが与えられているのではないのでしょうか。人間のリミットを超えたところにある「C」の希望の光を胸に、私たちがそれぞれ置かれた場で和解のための「旅」のために励まし合っていければと思います。和解を必要としている隣人が遠くに近くにいるからです。

このICUで「和解」を共に考え、探る旅にこれまで加わってくださったすべての現役の学生・教職員・同窓生の皆さんに感謝し、またこれからより多くの方々に、「和解の旅」にある希望を知っていただけたらという願いを込めて私からのご挨拶とさせていただきます。

When I was a September transfer student at ICU, I discovered Intercultural Communication as the perfect major for me, encouraging me to look for possibilities to mend the gaps, for which I remain truly thankful.

During my 30 years of living in the UK, after learning about the shocking past history between the Japa-

nese imperial army and British POWs in Southeast Asia during the WWII, a significant turning point came for me when I was able to take part in a Reconciliation Service for British former Prisoners of War and the Japanese. As we, the Japanese attendees, were able to acknowledge and express in words our own country's past wrongs as a prayer of confession, I was suddenly overcome by a deep sense of release and outpouring of tears of gratitude. We then exchanged handshakes with the former POWs. This was my first encounter with the transforming grace of Reconciliation and I have been blessed with friendships with former detainees and their families ever since.

Since returning to ICU in 2019, I have been leading book groups with students, staff and alumni, starting with an inspirational memoir written by Ernest Gordon, a former British POW and translated by our own late Prof Kazuaki Saito. Through such book groups, an informal initiative, called "ICU Reconciliation Forum", emerged, organizing numerous lecture events and discussions on Reconciliation on campus, as well as summer off-campus retreats, supported by JICUF.

Reconciliation is a 'journey' with many obstacles as well as many discoveries. We are reminded that here at ICU, we have 'C' at the center. We are blessed to know 'Christ', the Prince of Peace, giving us hope for Reconciliation beyond our own failures and limitations. In this world fraught with divisions, it is my hope that we will continue to find encouragement here at ICU, including us the alumni, to take part in the journey of mending the gaps wherever we are.



学生も加わって盛り上がった懇親会



大学礼拝堂で開かれた総会

大学礼拝堂で桜祭り開催

文：長谷川由紀(本誌) 写真：吉富祐一

2024年の桜祭り(同窓会総会、DAY賞表彰、卒業50周年記念式典などの総合イベント)が3月30日、大学礼拝堂で開かれた。前年に続いて対面開催となり、集まった同窓生らは好天の中、ほころび始めたばかりの桜を楽しみながら旧交を温めた。

総会は前回同様、ハイブリッド形式で開き、礼拝堂には116人が参加。7人がライブ配信で視聴した。

総会では2023年度の活動報告と2024年度の活動計画の説明が行われた。廣岡敏行会長(31 ID87)は、コロナ禍を経て、ホームカミングや学

生向けイベントなど対面での行事が増えてきたことに触れ、今後も教職員、学生、同窓生が交流できる機会を増やしていく方針を表明した。同時に、Online Alumni Houseや、総会や評議員会のハイブリッド開催も引き続き実施し、より多くの同窓生が参加できるようにしていくと述べた。

総会ではまた、2024/2025年度の理事、監事、評議員、学生評議員の選出が行われ、太田信之役員選考委員長(33 ID89)が、プロセスの透明化など選考の理念やポリシーを説明。その後、廣岡会長の再任を含めた新役員

体制が賛成多数で承認された。

続いて、廣岡会長が「明日の同窓会」プロジェクトの進捗状況について説明し、これまでの議論を踏まえ、①同窓会事務局機能の大学への委託、②学生、教職員も含めた校友会化——の2点を継続して検討したいと表明し、賛成多数で承認された。

総会に続いて第19回DAY賞の表彰式が行われ、元国連大使の吉川元偉さん(18 ID74)、公認会計士の八田陽子さん(19 ID75)、英国国教会司祭のウィリアムズ(半田)郁子さん

(26 ID83)に賞が贈られた。

卒業50周年式典には、18期生31人が参加、長くICU高校教諭を務めた、ICU伝道献身者の会支部長、有馬平吉さんが代表としてあいさつし、「献学70年の節目に卒業50周年という記念すべき式典に参加できてこの上なく幸せ」と述べた。

大学食堂で開かれた懇親会では、ICU祭実行委員会の学生による募金呼びかけや同窓会グッズの販売も行われ、多くの同窓生らが思い思いに交流を楽しんだ。

改修前の本館オープンハウスに600人を超える来場者 ホームカミング2024

本館は2024年4月から1年間、耐震性の改善や空調・電気設備を更新する工事に入っている。立ち入りができなくなる前の3月、その本館を会場に、2024年のホームカミングが開催された。大学、同窓会、現役学生が協力して何カ月も前から準備してきたさまざまな企画を、献学初期の卒業生から幼児まで幅広い世代が楽しんだ。

文：新村敏雄(本誌) 写真：吉富祐一

本館の前身は中島飛行機三鷹研究所の設計本館。学内の教職員住宅も手がけた建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズが全面改修を担当し、4階部分を増築して、授業棟として1953年に完成した。それから実に70年にわたり、学びの場として学生を見守ってきたが、さすがにさまざまな経年劣化が進み、今回の長期改修となった。

ホームカミング当日の3月3日日曜日は、穏やかに晴れ上がり、満開の梅に迎えられて卒業生やそのご家族がイベントスタートの11時から次々と本館に足を運んだ。

プログラムのうち、3コースを用意したキャンパスツアーは、現役学生(本館、T館、D館、大学食堂、寮、新体育館をまわる一般コース)、大学の中嶋隆常務理事(キャンパスの森をまわるコース)、大西直樹名誉教授(本館の歴史がわかるコース)がガイドを

つとめ、どのコースも定員を超える参加者を集めて大盛況となった。

152教室では、吉富祐一氏撮影のキャンパスの四季の美しい写真展示と、1980年から2022年までの全Yearbookが閲覧に供された。自身の卒業年のものだけでなく、他の年のものも感慨深げに眺める同窓生の姿がいたるところで見られた。コロナ禍によりキャンパスへの立ち入りが制限された影響で、2021年のYearbookは版が小さく、ページ数も少なかったことも目を引いた。

隣の151教室では、卒業式の時に着用するキャップとガウンを貸し出すサービスを提供。東日本大震災やコロナで卒業式がなかった卒業生、すでに社会人生活が始まっていたため出席できなかった9月生など、着用希望がひきまきらず、12セットを用意して1セットにつき20分の利用時間制限を設け

たにもかかわらず、用意したセットがすべて出尽くしてしまう時間が続いた。

当日11時から3時間、教室を開放して即席ユニオンの会場に使っていただく企画には「ID06 section M」「Let's gather, 11期」「The Weekly GIANTS」など、セクション、同期、サークルの17グループから申し込みがあり、1階から3階までの教室でランチをとりながら楽しそうな笑い声があふれていた。

本館前のバカ山周辺では、高橋伸先生指導による子供向けのいろいろなゲーム「キャンパスで遊ぼう」や、和太鼓部のメンバーによる迫力ある演奏も披露され、多くの参加者、観客を楽しませた。

午後はT館、本館の4教室で講演会も開かれた。講師は森本あんり先生、田中かず子先生、Richard Wilson先生、吉川元偉先生の4人の先生方。森

本先生の講演「人がオトナになるとわかること」は会場が直前にT館の階段教室に変更されたが、ほぼ満席となった。

本館最上階の405教室は「本館にメッセージを残そう」という部屋になった。教室の壁(1面)、窓、黒板に、思い思いのメッセージをカラフルなマジックやチョークで好きなだけ書けるという趣向。「ありがとう本館!」「たかさんの思い出が詰まっています」などのメッセージで埋め尽くされ、卒業生の本館に対する思いがうかがえた。

終了後のアンケートでは「久しぶりに会えた友人が多かった」「講演会を聞き、授業を受けていた頃の気持ちに戻れて嬉しかった」「(工事が)完成したらまた来たい」などの声が多数寄せられた。



左から：Wilson先生の講義 / 学生引率のキャンパスツアー / 405教室では壁にメッセージを残せた



DAYトーク

今年度は1月13日（土）に、昨年度のDAY受賞者である横関祐見子さん（24 ID80）にご登場いただいた。（受賞者のエッセイは前号に掲載）

文：武藤小枝里（35 ID91、同窓会組織部） 写真：同窓会事務局

オンラインの向こうに、なつかしい笑顔が見えた。日本時間16時30分から始まったDAYトーク。スピーカーの横関さんは、アフリカ大陸の西岸、朝がはじまったばかりのセネガルの首都ダカールからの参加だ。大学卒業後、一貫してアフリカの教育開発を通じ、子どもたち、若者たちの未来作りに奮闘してきた横関さん、ほとんどのアフリカの国に赴き、フィールドから政策といったあらゆる場面で、活動し続けている。その歩みは、キャリアという言葉だけでは言い尽くせない、強く芯の通った生き様。「今、アフリカでおき

ていることを知って欲しい」、その横関さんの思いから、DAYトークでは、自身が今取り組んでいる、サヘル地域の平和構築について、皆で分かち合った。その話を聞く中で、横関さんのアフリカカンジャーニーの出発点が、ICUでの出会いや学びであったと知る機会であった。トーク後半、横関さんから参加者へ「ICUが、私たち卒業生が、アフリカにできることがあるはず、それをみなで考えていけたら」と、メッセージをいただいた。未来にむけて卒業生同士がつながっていく、まさに「明日の同窓会」の目指す姿がそこにあった。



【追記】

横関さんが問いかけてくれた「ICU卒業生ができることがあるはず」、その思いに強く共感した。様々な場面で活躍する卒業生の今を分かち合う中で、参加者も自分自身とICUの繋がりや卒業生同士の繋がりを再発見し、そして、新しいアクションにつながる機会を模索する、DAYは「成長し続ける同窓会」の原動力であると再認識する機会でもあった。

多くのICU卒業生が、途上国や紛争地域で、困難に直面する人々とともに、それぞれの持ち場で、地道に活動を続けている。自身もまた同じ分野で仕事を続ける中、「こんなところで」とか「え、あなたも」という出会いを数え切れないほど経験した。この機会がきっかけとなり、生命さえ危うい中でも学びを続けたいと強く願う子どもたち、若者たちのその思いに寄り添い、未来を信じる力を育む、多くの卒業生の今を、その働きが覚えらるることを切望する。

世界のあちこちで、今も、多くの卒業生が、破れ目に立ち、つなぎ目にならんと尽力している。ICUという糸が、ばらばらになりかけているこの世界をひとつにつなげていく力を持っているのではないか、そう信じている。

臨時総会のご案内

廣岡敏行会長のもと、2023年度より「明日の同窓会」プロジェクトとして、同窓会の持続可能な姿について様々な議論を重ねてまいりました。これまで理事会、評議員会ではもちろん、広く会員にプロジェクトのビジョンを説明し、意見を求めるため、対面とオンラインの説明会も複数回開催しました。同窓会内での議論と大学との交渉の

結果、2025年4月より「同窓会事務局業務を大学に業務委託する」ことを目指すこととなりました。大きな組織変革となるため、会員の承認が必要と考え、2024年秋に臨時総会の開催を予定しております。

是非たくさんの方にご参加いただき、賛否の一票をお示しく下さるようお願いいたします。

ICU同窓会臨時総会

（但し10月5日に開催される評議員会での承認を前提とします）

日時：2024年11月16日（土） 10:00 形式：オンラインのみ

参加および委任連絡 <https://forms.gle/VuVoUUMg9BLwJ6aVA>
（参加予定者にはオンライン参加のための情報を開催3日前までにメールでお送りします。）



Emergency General Assembly

（subject to approval by the Board of Councilors on October 5）

Saturday, November 16, 2024, 10:00 a.m.

Online only

For Participation/Proxy

<https://forms.gle/VuVoUUMg9BLwJ6aVA>

（Information for online participation will be sent by e-mail at least 3 days prior to the assembly.）

Visaゴールドカードが同窓会特別年会費**2,750**円（税込）でご入会いただけます！

しかも、カードご利用による売上の一部は同窓会に還付され、入会手数料も還元されます。

お車に乗る機会が多い方は

ロードサービス VISA ゴールドカード

特別年会費
3,300円（税込）



WEBでのお申し込みはこちら▼

<https://www.smtcard.jp/lp/goldcard2.html>

●お申し込みの際は団体コード入力欄に**50140**をご入力ください。

くわしくは同封のチラシをご覧ください！

●記載のポイント換算は1ポイント1円相当でポイント交換した場合です（交換内容によっては1ポイント1円相当にならない場合もございます）。●ポイントプレゼントにあたっては、新規入会特典へのエントリーが必要です。●いただいた個人情報は入会申込書送付先にVISAカード入会申込書を送付することに限定します。



ご入会＆ご利用で
最大**22,000**円相当
ポイントプレゼント
2024年12月31日まで



お問い合わせ ①郵便番号 ②ご住所 ③お名前（メールの場合：ふりがなもお願いします）④お電話番号 ⑤所属団体名：ICU同窓会をお知らせください。

☎ 0120-370-070 受付時間：9～17時（土・日・祝日・12/30～1/3を除く）

✉ Toiawase@smtcard.jp





入学から71年目 1期生が同期会開催

フロンティア精神を持って入学し、ICUの堅固な土台を築かれた第1期生。
90代の先達が、桜の咲き誇る今年4月、ICUにお集まりになった。魅力あふれる皆さんの様子をお伝える。

文：富岡徹郎 (26 ID82、大学常務理事) 写真提供：第1期生有志の会

4月4日(木)、ICU第1期生(1957年教養学部卒業生)有志の会が主催するリユニオンがアラムナイハウスで開催されました。桜が咲き誇るキャンパスに、1期生16人が、日本や米国から集まりました。このICUの桜並木の苗木も70年前に、1期生達が植樹したものでした。

1期生といえば、まだ大学の形ができる前の時代にフロンティア精神を持って入学し、ICUの堅固な土台を築かれた、ICUの宝物というべき方々です。198人の方が1953年に入学されたと記録にあります。卒業後それぞれの分野、世界で大活躍されている1期生ですが、その中から16人の方々が、集まりました。年齢は90歳を超えておられますが、とてもしっかりされていて、大変魅力的な大先輩方でした。またこの同期会のためにアメリカご在住の大和田康之先生、水上郁子さんのお二人がはるばる駆けつけてくださいました。ICU開学当時の写真も会場のアラムナイハウスに置かれ、昔話で大いに盛り上がりました。

開学時の学生選考に関して当時の湯浅八郎学長は次のように言っています。「ICUは、水準においても質においても優秀な学生を選抜するために

今までにない高度な基準を取って設けた」。1期生に関しては、3つの範疇から150人の学生に入学許可を出したそうです。学業成績を基準に全国47のキリスト教系高校から各1人、復帰前の沖縄を除く46の都道府県と五大都市から正式に推薦された者各1人、残りの3分の1を一般試験によって選抜。推薦されるためには学業の面で学年上位5%に入っているばかりか、高校内の活動においても、リーダーシップを発揮し、しかも、英語を完全にマスターできるだけの能力を備えている者でなければならなかったと記録にあります。

幹事役である金澤正剛ICU名誉教授が、仲間へのご連絡、会場予約やケータリングの手配などをきめ細かく準備されました。今回28人の方から出欠のお返事があり、欠席のお返事には、「今年は行けないが来年は是非とも出席するつもりだ」というものもあり、さっそく来年も4月4日に同じ場所で開催することが決まりました。そして残念ながらコロナ禍の間に9人の同期生が亡くなられたそうです。この中には、ICU元常務理事の茅野徹郎さんもうらっしゃいます。また、連絡の取れない方も年々増えているそうです。期会において幹事の金澤先生のようなま

とめ役のお働きは本当に重要だと思いました。

出席された岩切正一郎学長は、大学を代表して日頃から支えてくださっている1期生へ感謝の辞を述べました。次に、ロバート・エスキルドセン学務副学長が1期生との関わりで、大切なエピソードを話してくれました。それは副学長が、昔の書類を整理していたところ、自分はICU修士課程時代に1期生が創設した奨学金の奨学生第1号

として恩恵を受けていたことを発見したことでした。1期生へ感謝の言葉を述べるとともに、「自身も次の世代へ寄付をして、奨学金をつないでいきたい(Pay Forward)」と抱負を述べました。

最後に記念写真を撮りました。また来年も桜の咲く4月にキャンパスでお会いしましょう。ICUの土台を創られた1期生にあらためて敬意を表するひとときでした。

1期生の証言 ——1953年当時の1期生の様子が窺える『国際基督教大学創設史』(C. W. アイグルハート) pp. 165, 166より

「一九五三年四月一三日、われわれ一九八名の新入生が、心も踊るICU生の讚美歌『正しく清くあらまし』が歌われる中を行進した日から一年が過ぎた。一人々々が、この新しい生き方の中でベストを尽してこうと希望に輝いていた。未知でユニークで、大変な努力を要する、ここでの生活に耐え切れず、挫折しかけた者もいたであろう。しかし、ほとんどが喜びと感謝の念をもって困難を切り抜けた。勉学、語学の演習、その他、諸々の仕事を多く抱えながら、なんとか時間と精力をやり繰りしてクラブをつくり、軌道に乗せた。戦後以来、日本の教育の特徴となった一般教養課程の負担は大きく、自由にできる時間がほとんどなかったが、それも切り抜けた。そして、一〇月頃にはすべてを軌道に乗せ、先を見るゆとりができてきた。プルナー博士の来日は、われわれの士気を大いに高め、コンヴォケーションの講演者、ことにルーズヴェルト夫人、コムプトン博士やノーマン・カズンズ氏らの来訪も同様であった。コンヴォケーションが、社会に開かれた窓だとすれば、毎週、行われる礼拝はわれわれの精神的生活を豊かにする基盤であり、礼拝を通じてICUの真の姿が見えるようになった。クリスマスの祝典は忘れがたく、先生方の家庭に招かれたのも良き思い出である。素晴らしいキリスト者の交わり！ユニークなICU！とにかく、素晴らしい一年であった。やるべきことは、もっとあったかもしれないが、われわれとしては、『精一杯』の一年であった。」

あなたのご意思の実現に向けて、サポートいたします。

三井住友信託銀行の遺言信託

皆さまの財産に関するご意思を反映する遺言書作成のご相談や、遺言書の保管※・遺言の執行などを一貫してお引き受けいたします。まずは財務コンサルタントまでご相談ください。

※自筆証書遺言を作成する場合、自筆証書遺言書保管制度を利用し、遺言書は法務局にて保管します。

【遺言信託(執行コース)手数料等について(消費税等込み)】(2024年6月1日現在)

〈お申込時〉基本手数料:330,000円 別途、公正証書作成費用、戸籍謄本などの取り寄せに関する費用等が必要になります。

〈遺言書保管中〉遺言書保管料:毎年6,600円 〈遺言執行時〉遺言執行報酬:当社所定の報酬を申し受けます(最低報酬額:1,100,000円)。

上記はお支払プランの一例です。他のお支払プランもあります。詳しくは、窓口までお問い合わせください。※契約締結後に、解約、公正証書正本の保管辞退、遺言執行者への就任の辞退、遺言執行者の辞任等が生じた場合であっても、基本手数料はご返金いたしません。

◎国際基督教大学と当社は「遺贈による寄付制度」の提携をしています。

この制度により遺贈をされる場合は、遺言信託(執行コース)の基本手数料が5万円割引(税抜き)となります。ご相談の際にお申し出ください。

資料のご請求は以下までお問い合わせください。 ※資料請求以外の内容については、店舗や専門部署へお取次いたします。

0120-977-641

受付時間

平日9:00~17:00(土・日・祝日および12/31~1/3はご利用いただけません)

三井住友信託 遺言信託

検索



三井住友信託銀行

Think globally, act locally.

“ここ”から始まるストーリー

国内の“ある場所”で活躍する仲間にスポットを当て、その活動や経緯などについて話を聞くこのシリーズ。今回は、“国内”を飛び出し、タイに飛んだ。高校時代に出会ったタイ人の友人をきっかけに、タイにこだわり、タイの北部地方に根を張って、子供たちに読書の楽しさを教える堀内佳美さん。外国人には難しい、タイ内務省認定の財団(Foundation=日本の認定NPOやNGOに相当)設立にこぎ着け、少数民族の子供たちへの読み書きの手ほどきも行っている。



ランマイ図書館で、堀内佳美さん

タイ北部地方に10余年、子供たちに読書の楽しさを伝える

タイ 「アークどこでも本読み隊 (Bookworm Foundation)」創設者 堀内佳美さん(51 ID07)

文：望月厚志(本誌) 写真：アークどこでも本読み隊提供

高知県春野町(2008年に高知市に合併)出身の堀内佳美さん。生まれながらに目が不自由で、その後完全に失明する。15歳で筑波大学附属視覚特別支援学校高等部に入学するために上京、在学中に1年間米国ミネソタ州の高校に交換留学する。「さまざまな国のいろいろな人がいて、国際交流や国際協力に興味を持ちました」(堀内さん)。なかでも、タイ人との出会いが強い印象を残し、タイという国やタイ語に深く興味を持つようになった。

大学受験の準備もしながら、タイ語の学習も進めた。ICUのオープンキャンパスに行ったら、ICU宗務部とICU教会が共催しているワークキャンプがタイで行われていることを確認*、入学後は1年生でそのワークキャンプに参加し、ますますタイへの道にのめり込んでいくことになった。(※その後、開催地をインドネシアに移して行われていたが、2019年度以降コロナ禍で中断

中) 「ICUでは、2003年4月に社会科学科(当時)に入学したのですが、途中で語学科(同)に転科しました。グローバルハウスに住んで、アルバイトもしたり、サークル活動もしたり、いたって普通の学生生活を送りました。ICU時代にも、交換留学制度を使ってタイ・バンコクの国立タマサート大学に留学しました。卒論は『視覚障害がある学習者のための日本語教育の現状と課題』といったテーマで書きました」。

インド・カンタリインスティテュートでの刺激的な経験

2007年にICUを卒業、いったん民間企業に就職するも、タイに行きたい、社会貢献活動をしたいという強い思いから、企業は2年で退職した。しかし、そこですぐにタイに行かないのが、堀内さん。社会起業家を育てる、インド南部ケララ州にある研修所 Kanthari

(カンタリ) International Institute に入学する。「ここは、とても刺激的な学校でした。私の学年は12人でしたが、私のように高等教育を受けた人ばかりでなく、小学校も満身に卒業してなかったり、難民になったりと、さまざまなバックグラウンドの学生が、とにかく今の社会を変えたいという強い思いをもって世界中から集まっていました。実学が中心で、あるプロジェクトを想定してケーススタディをやる。予算を作って予算・実績管理をしたり、記者会見を開いたときにどのようにプレゼンテーションして、どのように質疑応答をやるのか。NPOやNGOを作ったら次の日から役に立つような勉強をしました。アジア人のメンタリティー、ヨーロッパ人のメンタリティー、アフリカ人のメンタリティーがぶつかり合って、とても濃い学びがありました」。

Kanthari International Instituteの

ースを1年で終え、いよいよタイでの活動を始める。「最初は、バンコクで単発のボランティアを少しずつという感じで始めました。」しかし、バンコクは大都市。すでにさまざまなNPOが活動しており、堀内さんが入り込む余地は少なかった。そこで地方でいい地域はないかと探しているときに、知人が現在の拠点となるタイ北部のチェンマイ県プラーオ郡(Phrao District, Chiangmai Province)を紹介してくれた。

「読書はお勉強」という風土に対抗

「タイの全体的な特徴として、『読書は勉強のためにするもの』という風土があります。日本のように子供の頃から読書を楽しむ、趣味は読書ということがほとんどないのです。それで、子供の頃から文字通り“本の虫”だった私は、タイの子供たちに読書の喜びを



伝えたいと活動を始めました。」

「プラーオに限らないのですが、地方に行くとも図書館が少ないし、数少ない図書館に行っても子供向けの本が全くないことが多いんです。また、本屋もほとんどないんです。それで、ここならやりがいがあるねということで、プラーオに決めました。」

2011年初めから少しずつ準備や引っ越しを進め、2011年8月ごろには拠点をプラーオに移し終えた。最初は、リュック2つ分約70冊の本を持って、あちこちに出前する活動から始めた。2012年2月には有給の職員も採用、2018年6月にはタイの財団法人（Bookworm Foundation：日本名「アークどこでも本読み隊」。アークはAlways Reading Caravanの略）としての認可がタイ政府内務省から下り、活動が起動に乗り始めたという。現在は、プラーオの街に構えたランマイ図書館と、堀内さんの地元高知県の支援企業から寄贈された移動図書館（日本の1トントラック程度の大きさの車両を改造）「はるの号」の2段構えで、活動を広げている。拠点であるランマイ図書館に子供たちに来てもらうほか、移動図書館に本を積んで、チェンマイ県各地の小学校や幼稚園を訪問し、子供たちに読書の時間を提供する。さらに、障害があったり、高齢で脚が不自

由だったり、さまざまな理由でランマイ図書館に来られない（子供にかぎらず）利用者の元へ本を持参し貸し出す「訪問図書館」事業も行っている。

山岳民族の幼児教育も開始

読書の楽しさを伝える活動だけでなく、北部の山岳少数民族の子供たちのために識字率向上活動も始めた。タイ北部の山岳地帯にはカレン族、リス族、アカ族といった少数民族がおり、それぞれタイ語とはまったく異なる独自の言語を持っている。そういった民族の子供たちが小学校に進学した時、タイ語や英語のアルファベットを知らずに引け目を感じたり、勉強がいやになったりする子供たちが少なくないという。そういった状況を解消しようと、チェンマイ県と隣のチェンライ県の2カ所に幼児教育センター「太陽の家」「笑顔の家」を創設、就学前の山岳民族の子供たちに基本的な読み書きと算数を教えている。

財団の経済的安定がこれからの課題

アークどこでも本読み隊の今後の展望について聞くと、「経済的な安定と自立ですね」と答えがすぐに返ってきた。「例えば、『図書館を建てたい』といった大プロジェクトを立ち上げると、



上左：クアンパーク幼稚園の移動図書館
上右：トラックを改造した移動図書館「はるの号」が到着し、列を作って本を借りるのを待つ小学生たち
中：米 Delaware 大学の学生たちが財団を訪問
下：幼稚園で移動図書館の本を楽しむ子供たち

支援してくださる方々は結構いらっしゃいます。でも、図書館の日々の光熱費、スタッフの活動費といった“地味な”支出のための資金を集めるのが、実は大変なんです。ですから、財団の

活動とは別に安定的な収入を得られるようなビジネスの仕組みをどうにかして作り上げたいと思っています。」
タイでの活動の将来に向け、その目は未来を見据え輝いていた。

結婚相談所で安心安全な婚活をしませんか？

結婚相談所 ラポート RAPPORTR

1年以内に**愛され幸せ婚**を叶えます

ICU卒業生同士のマッチングに力を入れるべく特別価格でご案内

ICU卒業生限定 特別プラン

性別や年齢
婚姻歴 不問

初期費用 ~~77,000円~~ → **11,000円**

海外居住の方
もOK!

*他に月会費11,000円とご成婚料(通常の半額)が必要です

- 業界最大級の結婚相談所連盟に加盟しておりご紹介できる登録会員数は約87,000人(初期費用20万円程度の一般的な結婚相談所と同一のデータベースを使用します)
- 東京都大田区を拠点に全国オンライン対応

結婚相談所ラポート
代表 古川 美穂子
(旧姓:山沢)
2002年卒業



ご興味をお持ちの方は

- 1 公式LINEにご登録
- 2 古川の自己紹介動画をご視聴
- 3 無料個別コンサルにお申し込み下さい

公式LINE



公式サイト



松本中央法律事務所

Matsumoto Central Law Office

弁護士 松本 典子

(ID01・45期・理学科生物学専攻卒業)

懇切丁寧に対応いたします。

お気軽にお問い合わせください。

全国からZOOM・電話相談対応

TEL

03-5776-2435

東京都中央区日本橋小網町8-2

WEB

<https://www.m-laws.jp>

E-mail: n.matsu@m-law.jp

取扱分野：企業法務一般・契約締結交渉・離婚・男女問題・遺言相続・環境問題・労働問題・債務整理・刑事弁護など



お邪魔します! あのメジャー

第28回 アメリカ研究

レイヴンスクロフト、クレア 助教

全31の中から気になるメジャーを紹介

今回ご紹介するメジャーは、学際メジャーであるアメリカ研究です。アメリカという特殊性と特異性をもった地域に対して、ICUのリベラルアーツがどのように効果的か。アメリカ文学を専門とされるレイヴンスクロフト、クレア先生にお話を伺いました。

文・写真：谷澤 聡 (本誌)

レイヴンスクロフト、クレア

RAVENS CROFT, Claire

国際基督教大学 助教

2020年にデューク大学で博士号を取得。専門は、エネルギー人文学、環境人文学、20・21世紀文学。著書 *Fossil Capitalist Realism: Contemporary Fiction and Climate Inaction* (化石資本主義リアリズム: 現代小説と気候無策) は、地球温暖化が広く受け入れられる中、気候無策の社会文化的・政治経済的側面を理解するために、「気候フィクション」と呼ばれる現代文学を検証するものである。炭素集約的な北半球の小説、リアリズムとSFのジャンルに焦点を当てた21世紀の文学の分析に基づき、イデオロギーの一貫性が失われる中、化石資本主義の覇権がいかに持続しているかを理解するために、地球温暖化について語られる物語の形式的な展開を分析する。



structures. Essentially, American Studies allows us to use a single nation-state as a springboard to explore the wider tapestry of global history.

A Diverse Classroom and Engaging Courses

The international makeup of ICU's student body fosters a vibrant learning environment in my classes. Students come from various backgrounds, bringing diverse perspectives on American politics, culture, and history. This rich exchange of viewpoints makes classroom discussions particularly interesting. I have the privilege of teaching a variety of courses at ICU. At the undergraduate level, I lead the introductory American Studies course (Principles of American Studies 101) and all-American literature classes. In addition, I offer graduate courses primarily focused on American cultural studies.

One unique undergraduate course I teach is "Principles of American Studies: A Science Fiction Film Class." This course uses science fiction films like *Invasion of the Body Snatchers* and *Blade Runner* as a springboard to explore aspects of American history and culture. While the initial appeal for many students might be the opportunity to watch films, the course ultimately challenges them to analyze the narratives and their deeper

The Interdisciplinary Power of American Studies

An American Studies major is unique in its interdisciplinary approach. This allows students to examine a single subject, like the United States or its history, but through multiple disciplinary lenses simultaneously. This framework significantly enhances students' critical thinking skills. In contrast, many other majors focus on a single topic or a few related topics using the same methodology repeatedly. While one can become very skilled in that method, American Studies offers a dynamic

learning experience.

For example, in a history class, you learn about a subject through the lens of historians. Then, in a political science class, you gain a different perspective on the United States and learn a different method for understanding it. In a literary studies class, you approach the same subject yet again from a completely different angle. This requires students to not only learn about a single topic but also to explore it through multiple methodologies. This multifaceted approach encourages students to question the topic itself, ultimately

strengthening their critical thinking skills. It also fosters a love of learning and the ability to think in innovative ways.

This interdisciplinary approach makes American Studies a dynamic field. While the United States serves as a central focus, the field isn't limited to studying it in isolation. Examining the U.S. through multiple lenses allows us to gain insights beyond its domestic development. We can illuminate broader historical trends like the rise of Japan, the evolution of the global economy, or the shifting dynamics of international power

症状を改善して 元気な毎日を送りたいあなたへ

ICU卒業生の佃隆(44期ID00)とパートナーの佃美香が1993年より運営しており、毎年1万人以上の方が通院されています。三鷹駅南口徒歩1分の当院では、姿勢のゆがみと症状の関連性を見極めるカイロプラクティック検査を行い、症状の原因を特定します。

ファミリーカイロプラクティック三鷹院

「ICUアラムナイニュースを見て…」とお電話ください。

tel 0800-888-4270

web <http://mitaka-chiro.com>

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀3-24-7 平嶺ビル301号室



当院の統計データ

過去1年間の初診時の症状別の割合



connections to American society.

Rounding out my course offerings are various American literature courses. These classes can cover a broad range of topics, from foundational texts and authors to more specific themes like American prose focused on climate change or representations of race relations in the U.S.

A Diverse Student Body and Popular Courses

As a thesis advisor, I typically work with a small group of three to four senior thesis students, drawn from both American Studies and Literature majors. My classes also reflect this diversity. General Education and introductory-level courses (100 level) typically have larger enrollments, ranging from 30 to 60 students. In contrast, upper-level courses (200 level) have a more intimate setting, with 15 to 20 students. American Studies, with its five faculty members representing various disciplines, remains a relatively small major at ICU.

Students become interested in American Studies stems from several factors. Many students, particularly those interested in American-related topics, find the major appealing. Additionally, Principles of American Studies serves as a popular pre-departure course for students venturing abroad to the United States for a semester or year. This course provides them with a foundational understanding of American culture and history.

Another factor contributing to the major's popularity is its appeal to international students seeking to strengthen their English skills. These students often view Principles of American Studies, History of American Literature I, II, or similar introductory courses as a valuable starting point after completing the English for Liberal Arts Program (ELA). By combining the study of

literature and film with American history, these courses offer a well-rounded approach to language learning.

Bridging Narrative Analysis and Film Studies

My research primarily focuses on narrative analysis in literature, particularly realist and science fiction novels. However, I've found that the analytical skills applied to novels can be effectively used for film narratives as well. This realization, coupled with students' strong visual orientation, has led me to incorporate film studies into my teaching. My goal is to move beyond passive consumption and equip students with the tools for critical film analysis. After all, film and fiction share many commonalities, despite their distinct forms.

It's important to note that American Studies, by its nature, is interdisciplinary. While I utilize narrative analysis, other professors at ICU, like Ishio-sensei and Kim-sensei, might approach the same historical content through political science or sociology lenses. Ultimately, the unifying theme is the exploration of American history, albeit through diverse analytical frameworks.

The transformative power of film analysis is truly remarkable. Watching a film like *Blade Runner* through this critical lens allows students to glean surprising insights into American history. To further enhance student engagement, I received a grant from the Japan ICU Foundation to host bi-weekly film screenings on campus. This initiative, separate from formal classes, allowed interested students and faculty to participate and earn extra credit.

Within the classroom setting, however, showing films during class time allows for deeper in-class discussions. Students complete analytical essays and historical reports related to the films. Researching a specific topic and then sharing their findings with

the class fosters a collaborative learning environment where students explore the connections between history and film. This innovative approach is not only rewarding for me, but also fosters a deep engagement among my students. They appreciate the opportunity to analyze films beyond entertainment value and discover the profound social and historical messages embedded within them.

As a relatively new faculty member at ICU, I've been impressed by the enthusiasm and active participation of the students here. While I haven't taught at other Japanese universities, compared to my experience at Duke University and the University in Louisiana, the student body at ICU displays a distinct level of engagement, which I find very rewarding.

Critical Thinking and Versatility: Strengths of the American Studies Major

An American Studies major equips students with a valuable skillset applicable to diverse career paths. The interdisciplinary nature of the program fosters critical thinking, writing proficiency, and the ability to analyze complex problems. These skills are highly sought after in fields such as education, law, and research, but also extend to any profession that requires strong communication and analytical abilities.

The program's focus on the United States provides a springboard for students with specific career aspirations. Students with an interest in business or political science can leverage American studies to gain a deeper understanding of the American context, potentially enhancing their career prospects in these fields. Beyond specific careers, American studies cultivates a well-rounded skillset that translates well to various professions,

including international affairs, public service, journalism, and communications.

Looking towards the future, I believe American studies plays a crucial role in fostering a global perspective at ICU. While I value the importance of studying other regions, a strong grasp of the United States is vital for understanding the current global order. The U.S. has played a significant role in shaping the 20th century, and its influence continues to be felt around the world.

Ultimately, American studies empowers students to critically examine the world we live in. By analyzing the United States' role in shaping the global landscape, students gain a deeper understanding of the present and the potential for a different future. This critical perspective is perhaps the most significant contribution of an American Studies major.

アメリカ研究のデータ

● 開講されている主な授業科目
(2024年度現在)

- アメリカ学原論
- アメリカの社会問題
- アメリカ学特別研究
- 人類学原論
- 経済と経営のための統計学
- ラテンアメリカの政治と国際関係
- アメリカ文学史I、II
- アメリカ散文I
- アメリカにおける言語
- 西洋の音楽
- 現代メディアと音楽
- アメリカの神学
- キリスト教史I、II
- キリスト教倫理
- 国際政治学
- 政治学概論
- 社会学原論
- 政治社会学



ICU 教会での結婚式のご予約・ご相談は株式会社 ICU サービスまで！

株式会社 ICU サービス

国際基督教大学 本館棟 2 階
TEL: 0422-33-3530 MAIL: info@icu-service.com

翻訳・通訳 36年の経験と実績

マンガ
海外で大人気の日本の漫画!
EXIMは漫画の翻訳も得意です。



Japanese manga are sweeping the world. EXIM's translations of famed manga like "Lone Wolf and Cub" (子連れ狼) have won the prestigious Eisner translation award. Our translators are ready to meet your needs.



Dana Lewis
EXIM チーフ・トランスレーター

一般的なサービス ● 翻訳: IR資料、契約書、学術論文、講演原稿、パンフレットなど
● 通訳: 会議、セミナー、商談、会見など (「オンライン通訳」可能)
▶ 英語、欧州言語、アジア言語

翻訳・通訳・制作 (デザイン・印刷)

創立 36年

(株) エクシム・インターナショナル
EXIM INTERNATIONAL, INC.

〒105-0013 東京都港区浜松町2-2-15 セネラルビル3F ● TEL 03-3431-2118 ● E-mail: tokyo@exim-int.com

President 永島 克彦 (14期) Advisor 比奈地 康晴 (14期)

♡ ICU同窓生10%割引

03-3431-2118
URL: http://www.exim-int.com/

7 People 手塚一郎 (15 ID71)

各ジャンルで活躍の同窓生を紹介

吉祥寺駅北口から徒歩1分。眼前に広がる飲食店街「ハモニカ横丁」で、その看板的存在のキッチン&BAR「ハモニカキッチン」をはじめ10以上の飲食店を経営する手塚一郎さんは、ICUの出身。ルーツは、在学中にはじめた学内有線と、それに端を発したビデオ販売店という。

文・写真：滝沢貴大（本誌）



幼いころから「優等生」 ICUに進学し、始めた学内有線

手塚さんは1947年、栃木県に生まれた。幼いころから「優等生」で、中学時代は生徒会長。高校は県内屈指の進学校・県立宇都宮高校に進学した。中学時代の部活動での理不尽な指導への反発などもあり、「当時の自分は『民主主義の紅衛兵』のような理論武装をしていた。頭でかちで、栃木の田舎で息苦しかった」。大学は東京へ進学しようと決意していたところ、同級生から「ICUという面白い大学があるから受けないか」と誘われたという。

「結局、俺だけ受かったんだだけ。面接で一緒だった帰国子女のやつが英語で『緑がきれいな大学だから来た』とかって言っていて、腹が立って『これから全部日本語でしゃべります』と言って、ICUの『少数精鋭』やキリスト教を学ぶ意義を日本語でまくし立てた。たぶん、そういう変なやつを求めてたんだよね」

そうして入学したICUだったが、在学中は学生紛争のまっただ中。学校はバリケードで封鎖され、「話し合いというレベルではなかった」という。そんな中で立ち上げたのが「学内有線」だった。「テレビを通じて、もう少し日常的な付き合いが生まれればと思った」。故・古屋安雄牧師（当時。のち

に名誉教授）からお金を借り、当時は高価だったビデオカメラなどの機材を購入。学内のラウンジにテレビを設置し、教授へのインタビューなどを撮影して放送し、1年ほど運営した。現在、ハモニカ横丁の店舗を運営する母体の名称は「ビデオインフォメーションセンター（VIC）」だが、その名称はこの頃の名残だ。

大学を卒業後も、ビデオにまつわるビジネスを始める。ビデオ機器の販売店を営みながら、70年代から80年代前半にかけては、唐十郎の「状況劇場」や寺山修司の「天井桟敷」など、当時全盛だった「アングラ演劇」をビデオで記録することに注力。「当時はまだガリ版刷りだった『ぴあ』をめくりながら、自分が日本のカルチャーの中で面白いと思ったものを撮影させてもらった」。撮影時間は計3000時間

ほどにも及ぶといい、15年ほど前には慶應義塾大学アート・センターの担当者らの手でデジタル化され、当時を知ることができる貴重な記録として保存されたという。

「俺たちの仕事は終わった」

しかし、90年代にもなるとビデオ機器が比較的廉価になり、各家庭や各劇団にも普及。「俺たちの仕事は終わったんだな」。そう思い、ハモニカ横丁で営んでいたビデオテープ販売店の2階を利用して、「僕が焼き鳥好きだったから」という理由で金土日だけ焼き鳥を提供する「ハモニカキッチン」を営むようになった。

これが、手塚さんにとって転機となった。「飲食店はメニューも内装もBGMも全部好きに決められる。その自由さ、面白さにひかれていった」。駅近

TEZUKA, Ichiro

1947年、栃木県生まれ。県立宇都宮高校からICUへ進学し、卒業後、吉祥寺にビデオ機器販売店を開店。98年、吉祥寺駅前のハモニカ横丁に「ハモニカキッチン」を開店し、徐々に規模を拡大。現在は同横丁内に10超の飲食店や、その他吉祥寺の雑貨店など計30超の店舗を運営している。

の立地や、当時は珍しかった立ち飲みスタイルの営業が功を奏して経営が軌道に乗り、徐々に店舗数を増やしていく。ハモニカ横丁は闇市にルーツを持ち、細い路地にお店が立ち並ぶが、各店が閉店するタイミングで大家から店を任せられ、カフェ、バーと手塚さんが手がける店舗が増えていった。「最初はシャッター街のようだったが、段々盛り上がっていった。多店舗を運営していると、たとえばビアフェスみたいなイベントを全店連動で企画できるため、ビールメーカーの協力が得られやすいなど、横丁に集中して出店したことでのやりやすさも出てきて、今にいたります」

「ビデオ」から「ハモニカ」へ 一貫するもの

栃木からICUへ進み、ビデオ稼業から飲食店経営者へ。その中で、一貫するものはあるのか聞いた。「ハモニカでやっていて、仮想敵は『六本木ヒルズ』なんです。一度更地にして、何も無い空間に豪華な建築物を作って、世界的なブランドを呼んできて、『ここに街を作りました』と。人間が自然を超えて、街を作れるんだと。そういうものへの対抗心があります」。そして、こう続ける。「僕の場合は、『作る』ということが非常にみつともないことに思える。なので、ビデオを撮影する以外は、物を書いたりとか、そういうことを禁じてきたんです。すごく息苦しい生き方だと自分でも思いますが、『作るような、作らないような』。それが全てに共通するものです」

私たちは、「はたらくをよくする®」会社です。





ピースマインド株式会社
代表取締役社長・
共同創業者
荻原 英人 (ID00)

SOCIAL ISSUES

はたらく人と職場の多様な課題



OUTCOME

いきいきとした人と職場を増やす



「はたらくをよくする」職場づくりをサポート！専門家監修のお役立ち記事です。ぜひご覧ください。

エンプロイーサクセス部
人事グループ長
小島 真理 (ID87)

EAP 従業員支援プログラム

産業医業務受託サービス

ストレスチェック

健康経営支援

研修

クライシス支援

休職・復職者支援

ハラスメント対策支援

ウェルネスプログラム

WHY PEACEMIND

サービス開始から **25** 年

お取引企業 **1400** 社/年

外資系顧客構成比 **35** %

03-3541-8660

ピースマインド株式会社



左から：合宿の食事風景 / 練習の様子 / 現役生とOBOG合同ステージを終えて

From the University 大学のページ

献学時、または皆さまが在学されていた当時から続く学生団体が、今も多数活動しています。学業だけにとどまらないICUのもう一つの魅力、課外活動における学生の活躍をご覧ください。

文・写真：各団体より提供

ICUグリークラブ

ICUグリークラブ（通称グリー）はICU内唯一の混声合唱団です。1953年4月28日に一期生の入学式が行われたのちに学生の間で自然発生的に発足しました。現在はICUの入学式や卒業式など公的行事、また春と秋の定期演奏会で合唱を披露しています。他にもICU教会の聖歌隊とのコラボレーションや、カリフォルニア州のYoung People's Symphony Orchestra や他の音楽・合唱団体様との合同演奏会もあり、発表の機会がたくさんあり外部との交流も盛んです。

団体の魅力は、なんとと言ってもコミュニティです。部室はいつも歌声と笑い声、他愛もない会話で溢れています。最近では、部室に保管されていたカセットやCD、グリー専用「ガラケー」が見つかり盛り上がりました。このコミュニティは現役生のみならず、卒業生を含めた1期生からのすべての部員が「グリー」という共通のアイデンティティを持って集結します。現部員のID25、ID26は新型コロナの流行がだいぶおさまった時に入部しました。そのため、コロナ時代の活動を直接体験していません。しかし、コロナからの復帰や復活が如何に大変で、失ったものが大きかったか…それはID23や24の先輩方の姿勢からよくわかりました。ID26が入部したての頃は、先輩方の「コロナで出来なかった演奏会を、今年こそ開催するぞ!」という非常に熱い思いを感じ、その背中についていくだけでした。今では、当時の先輩方が計り知れないプレッシャーや重責、そしてグリーへの愛情を持って開催を実現させたことを、痛切に想像できます。

現役生とOBOGとの交流には、2つの形があります。1つ目は、演奏の機会を通じての交流です。例えば、昨

年は創立70周年を記念し、定期演奏会で現役生とOBOG合同ステージを開催しました。1期生の方々をはじめ、幅広い世代との共演を機に、OBOG主催のコンサートにも足を運ぶことができました。また、有馬平吉先生のお声かけで演奏させていただきました。

もう一つは日々の交流です。合唱指導、夏休みの合宿への参加や、リハールにおける助言、指揮者としての練習の進め方・選曲に関する相談など、いつでも寄り添ってくれるOBOGの優しさなくしては、活動を続けられなかった現役生も多いと思います。現役生の裏舞台を支えてくださるという交流も大事な意味があるのだと感じます。

Facebook等SNSでの情報発信も行っています。より多くの同窓生とステージをご一緒し、現役の活動を見守っていただければと思います。

【設立年】 1953年
【現在の在籍人数】 25名
【活動日】 水曜日昼休み、土曜日午後
【活動場所】 D館西棟会議室
【今後の予定】
 秋の定期コンサート (9/21)、ICU祭アカペラカフェ (10/13、10/14)、ICU祭チャペルコンサート
 ICUグリークラブInstagram
【@icugleeclub】




ラグビー部

プレイヤー 13人、マネージャー 10人。現在のラグビー部における最大の障壁は人数です。プレイヤーも、その大半は大学からラグビーを始めたメンバーで、試合に出ること自体が大きな関門であり、勝つことは二の次になっ

てしまう節がありました。そんな中、2024年4月には「シーズン全勝」という目標と、「一勝懸命」というチームスローガンを打ち出しました。

現在ICURFCは、全国地区対抗大学大会関東1区2部リーグに所属しています。「シーズン全勝」は数年来の悲願である1部昇格を今年こそ実現するという覚悟を、「一勝懸命」は目の前の一試合一試合に各々が真摯に向き合い全力で臨むことで勝利を目指すという志をそれぞれ表しています。

強豪校に比べたら、部員が持つ経験や知識量は圧倒的に劣ってしまいます。しかし、チャレンジャー精神はどこにも負けません。練習は週に3日3時間ずつと決して多くはない分、密度の高い練習にするよう心掛けています。

また、学年やポジションの垣根なく練習終わりにご飯へ行ったり、休日に出かけたりもしています。一個人としてかけがえのない絆や信頼関係を築こうと、「On-the-fieldでは100%熱く真剣に、Off-the-fieldでは100%楽しむ」をモットーに据え、取り組んでいます。

このような先輩・後輩という括りに捉われず、互いを尊重し、本音をぶつけ、背中を預けられる関係づくりというのは、歴代の先輩方から受け継ぎました。こうした素敵な伝統を次の代にも確かに残すべく、試行錯誤を続けています。1959年に創立され、今年で65周年を迎える国際基督教大学ラグビー部。直接知っているのはID26が入部してからの数年間のみですが、これまで関わらせていただいたOBOGのお話を聞く限り、このコミュニティの温かさは創立以来変わらず続いていたように感じます。これからも、この伝統ある部の一員として一人ひとりが誇りと帰属意識を持てるようなチームづくりに励んでいきます。OBOGの皆様には日頃より多大なご支援・ご

協力をいただいております。この場をお借りして感謝申し上げます。

ラグビーは15人制のスポーツですが、チームは15人だけで成り立つものではありません。少しでもICURFCに想いを馳せていただければ幸いです。そして、ぜひ一度フィールドにお越しください。

【設立年】
1959年 (65年目)
【現在の在籍人数】
約25名
【活動日】 週3日 (長期休みは週4日)
【活動場所】
ICU人工芝フィールド
【直近のイベントや試合等】
10月からシーズン戦が始まります！試合の応援をどうぞよろしくお願いいたします。
【SNSおよびメールアドレス】
Facebook: @ICURFC
Instagram: @icurfc、@dailylife_of_icurfc
X (Twitter) : @ICURFCJPN
Email: 2017icurfc@gmail.com
ラグビー部 Instagram [@icurfc]



訂正：前号の当ページ内、サッカー部による寄稿につきまして、サッカー部から、創立年は1953年ではなく1964年だったとの申し入れがありましたので、訂正いたします。

Correction:
Regarding the article provided by the ICU Football Club (ICUFC) in Alumni News vol. 140, ICUFC was established in 1964, not 1953. We received this correction from ICUFC.

*このページは、各学生団体からの寄稿で構成しており、内容の事実関係の確認は当該団体において行われております。
*The articles that appear on this page are provided by student groups and clubs. As a principle the facts in the articles are checked by them.



左から：新歓試合 / OB 戦試合後の挨拶 / OB 戦での集合写真

From the University

Many of the student groups, established when ICU first opened its doors to students and also while you were students at the university, still continue to be active today. Not just limited to academic studies, ICU's appeal also extends to its extracurricular activities. Please take a look at the active participation of students in their extracurricular activities.

Text provided by each group and club

ICU Glee Club

The ICU Glee Club (commonly known as the Glee) is the only mixed choir at ICU, founded spontaneously among students after the Matriculation Ceremony for the inaugural class on April 28, 1953. The choir now performs at ICU's Matriculation Ceremonies, Commencement Ceremonies, and other public events, as well as at regular spring and autumn concerts. Other activities include collaboration with the ICU Church Choir and joint concerts with the Young People's Symphony Orchestra of California and other music and choral groups, and the club have plenty of opportunities to present our music and interact with the outside world.

The appeal of the group is a sense of community, after all. The clubroom, even during breaks between classes at the university, is always full of singing, laughter, and idle conversation. Recently, cassettes and CDs stored in the clubroom, as well as a flip mobile phone used exclusively by Glee, were found, and we had a lot of fun imagining what kind of activities Glee had in the past. This community is not limited to current students only but brings together all club members from the alumni, including the inaugural class, under the common identity of "Glee."

ID25 and ID26 joined the club when the Covid-19 pandemic had subsided considerably. As such, we did not directly experience the activities done during the pandemic. However, we could see how hard it was to "come back" and "recover" from it, and how high the cost of what we had lost was... we could see this from the attitude of the older members of ID23 and ID24. When ID26 first joined the club, we felt the passion of the seniors through such words as, "This will definitely be the year to hold the concert we couldn't do

because of COVID-19!" Back then, all we could do was to follow the seniors. However, we can strongly imagine that the seniors at the time held the concert under enormous pressure and responsibility as well as the love for the Glee Club.

There are two forms of interaction between the current Glee Club students and alumni: the first is interaction through performance opportunities. For example, last year, to commemorate the 70th anniversary of the Glee Club's founding, a joint stage performance was held by the current students and alumni at the regular concert. This was an opportunity to perform with a wide range of generations, including inaugural class students. It led to our visit to concerts organized by the alumni. Also, former high school teacher Mr. Heikichi Arima invited us to give a performance.

Another form of exchange is the daily one. Many of the current students would not have been able to continue their activities without the kindness of the alumni, who are always there for them, such as choral guidance during rehearsals, participation in summer vacation camps, evaluation of their performances at rehearsals, and advice on how to proceed with rehearsals and music selection as conductors. Their interaction is significant in that they gently support the current students behind the scenes.

We will be sending out information via Facebook and other social networking services. We hope to share the stage with more alumni and have them keep an eye on the activities of the current members.

【Year of foundation (continuing for 71 years)】 1953
【Number of current members】 25
【Days of activity】 Wednesday lunchtime and Saturday afternoons

【Place of activity】

A Conference Room in D-kan West Wing

【Recent events, contests, etc.】

Regular autumn concert (September 21), ICU Festival A Cappella Café (October 13 and 14), ICU Festival Chapel Concert

ICU Rugby Football Club

13players and 10managers — The biggest obstacle ICU Rugby Football Club (ICURFC) faces today is the number of members. And many of the 13 players started rugby at ICU, and entering a match has been the main challenge for ICURFC. So winning has tended to be our second concern. Under this circumstance, our season goal 'to win every match of the season', and our team slogan "一勝懸命" ("IsshoKenmei" our utmost effort towards each victory) were decided in April 2024.

Currently, ICURFC is part of National Inter-District University Tournament Kanto District 1, Division 2 League. 'To win every match of the season' describes our determination to achieve the team's long-held dream of promotion to Division 1. "一勝懸命" embodies each member facing every single match with sincerity and putting their utmost effort to win it.

We have far less rugby experience and knowledge than those in powerhouse schools. However, our challenger spirit is second to none. Although we practise only three times a week, we try to maximise the quality each time.

Also, we go out for meals after practice and hang out on holidays together, regardless of the year differences and whether we are players or managers. We are trying to build unwavering bonds and trust, upon the motto of 'working 100% hard on the field, and having 100% fun off the field'.

We have inherited from our se-

niors the idea of building a relationship where we respect each other, express our true feelings to each other, and trust each other with all our hearts, regardless of the year we are in. We are continuing our trial-and-error process to ensure that these wonderful traditions are preserved for the next generation and beyond.

Founded in 1959, ICURFC celebrates its 65th anniversary this year. We have only known the club directly for a few years since ID26 joined. But having heard from the alumni we have interacted with, we feel that the warmth of this community has been present ever since its inception. We will continue to work hard to make sure that each of us can have a sense of pride and belonging as a member of this traditional club. We would like to take this opportunity to extend our gratitude to our OB/OGs for their constant support and co-operation.

Although rugby is a 15-player sport, a team is not made up of just 15 players. We are beyond honoured if you think of ICURFC in some small way. And if time allows, please visit us on the field.

【Year of Establishment】

1959 (65th Anniversary)

【Number of Current Members】

Approximately 25 members

【Activity Days】

Three days per week (four days during long holidays)

【Activity Location】

ICU Field

【Upcoming Events or Competition】

The season will begin in October! We'll appreciate it if you come to the matches to support us.

【Social Media】

Facebook: @ICURFC

Instagram: @icurfc, @dailylife_of_icurfc

X (Twitter): @ICURFCJPN

Email: 2017icurfc@gmail.com

From the Alumni House

アラムナイハウスから

ICU心理臨床家の集い総会報告

文：佐藤枝里 (32 ID88/G1990)

アフターコロナ時代を迎え、ダイバーシティの推進やハラスメントの予防がより推奨される昨今、入学式での世界人権宣言への署名から学生生活が開始するICUの恵まれた学修環境を思います。そのような中、2024年2月25日、第29回「心理臨床家の集い」が開催され、23人のメンバーがアラムナイハウスに参集しました。

今回のテーマは「多様性と私」。横浜インターナショナルスクールのカウンセラー、熊本エリザ氏(31 ID87)をスピーカーに迎え、氏が実践してこられた多文化教育の理念と実際に触れる好機となりました。異なるルーツや価値観、生活習慣を持つ子どもたちの心理的成長促進の軸として挙げておられた「自分自身を受け入れ認める力」「自分自身を言葉で表現できる力」「他者を尊重できる力」は、心理臨床のどの領域にも通じる普遍性が感じられ、示唆に富むものでした。

ICUを出て他大学の大学院で臨床心理学を学ぶ大学院生に加えて、来年度から心理臨床の仕事をする研修生もご参加くださり、バラエティに溢れるICUならではの、語らいの時間は1年間のご褒美に値するものでした。川瀬正裕会長(23 ID79/G1981)と事務局スタッフ、世話人を務めてくださった石川真理子さん(46 ID02/G2004) 清田真由美さん(G1994)に謝意を表したいと思います。



地方創生支部からの近況報告

文：臼井頼子 (35 ID91)

ICU地方創生支部は3月2日に、ICU地方創生研究会第二回イベントを開催いたしました。

安島裕大さん(68 ID24)の現在の活動について詳しく教えて頂きました。小さい頃から環境問題に興味があった安島さんがたどりついた考え方が、「自分たちの暮らしを自分たちでともに作る」というもの。

その実現を目指しているぶんじ寮に出会い、その初期メンバーとして、運営に大きく力を注がれました。そのぶんじ寮にお邪魔しましたが、「まちの寮」として地域に開かれている、大変素晴らしい

コミュニティでした。地域の人々が楽しめる企画をどんどん出し合うことで、近所の人々がふらっと遊びに来たり、地域の方の困りごとを助けるお返しにお野菜をいただいたりしていることに感動しました。この経験を活かし、安島さんは現在、ぶんじ寮を出て、新たに新小金井駅周辺の空き店舗を利用したコミュニティ作りに挑戦しています。彼の活動には参加者全員が賛同し、彼をサポートしたいという気持ちで一致し、一緒にアイデアを出し合いました。

私たちは今後も彼の活動を支援し、地域の活性化に向けて考え、行動していきたいと思っています。そのために、より良い地域づくりに取り組む支部を設立し、研究を続けていきます。



Financial ICU支部 講演x懇親会のご報告

文：青木正彦 (22 ID78)

Financial ICU支部では4月15日に講演 × 懇親会形式の「Learning & Networking」を開催し、ID78からID27まで31人の卒業生と13人の学生が参加しました。

第1部の講演では、ドイツの大学院でサステナビリティビジネスやESG投資を学びMAを取得した秀島真奈さん(62 ID18)に、大学院で学ぼうと思った理由や学ぶ中で感じたこと、考えたことをお話いただきました。

質疑では、ドイツ国内の自動車業界の動向からGLS銀行の投資行動のインパクトまで、専門的な質問も出て、ICU(卒業生)の関心の広さが伺えました。

第2部の懇親会では、講義室や料理・飲み物カウンターにいくつもの輪が出来て、久しぶりの方や初めての方とも話が盛り上がり、お話を夢中でたくさん料理や飲み物が残ってしまいましたが、ESGの観点(1)から学生のみなさんを中心に持ち帰って頂きました。

今回はいつもの金融のOBだけでなく、海外大学院に興味を持つ若手の卒業生や学生のみなさんにも幅広く声掛けをし、多くの学生の皆さんに参加頂きました。また、今回は広く実行委員を募集し、多くの方のご協力で開催出来ました。改めて、講師の秀島さんと実行委員を務めて

くださったみなさんへの感謝をお伝えしたいと思います。有難うございました。Financial ICU支部は、金融業界や財務・会計分野のOB・OGのICU同窓生にビジネスやキャリアデベロップメントに活かせる交流の場を提供し、また大学や後輩学生のためのサポートを提供しようという目的で設立されました。

今後とも、卒業生のLearning & Networkingの2本柱と大学・学生への支援を中心に、卒業生と学生のみなさんが刺激を感じられるような活動を行いたいと考えています。



献学70周年に「記念碑的出版物」

文：ICU伝道献身者の会 支部長・有馬平吉(18 ID74)

2月26日、新教出版社から『われら主の僕—リベラルアーツの森に生まれ』が出版された。ICUは牧師養成大学ではないが、牧師・伝道者になる人を多く輩出してきている。初期の卒業生で天に召される方々も出てくる中、早く「証言集」を集めようという動きが起こり、さらに一冊の本にしようという展開になり、同窓会支部「ICU伝道献身者の会」が引き受けることになった。JICUFにも支援を受け、宗務部・図書館はじめ、多くの学生・先生方の協力も得て、完成するに至った。この本は「説教集」ではなく、キャンパスで学生として、如何に生きるかを真剣に考え、キリスト教と出会い、さらには伝道献身者にまで至った「青年」たちの証言集である。その点で、この本は学生たちにも是非読んでもらいたい。献学70周年という節目の年にICUの「C」の意味を改めて振り返る「記念碑的な出版物」になるであろう。



The 18th Group ICU Exhibition

Text by Naoki Ochi (12 ID68),
Hiroshi Shima (13 ID69)

How would you like to participate

in the Group ICU Exhibition?

The 18th Group ICU Exhibition will be held at the 2F gallery of the Tokyo Kotsu Kaikan located in front of JR Yūrakuchō Station from Sunday, February 2nd to Saturday, February 8th, 2025.

The 17th Group ICU Exhibition was held this February after a few years pause due to the COVID pandemic. 15 alumni of ICU presented their works of art, covering oil paintings, water paintings, calligraphy, photographs, ceramics and Noh masks. We were very happy to draw a large audience of about 300.

We hope this exhibition will provide a good place for the reunion of alumni as well as an opportunity to have new encounters, dialogue and communication beyond the alumni circle.

How would you like to display your works of art at the next Exhibition?

We are certain you will be pleasantly surprised at their wide-ranging reception, as we have already experienced. Those who are interested in the Exhibition should please contact the following:

Ochi: 080-5042-8001
n.ochi@jcom.home.ne.jp
Shima: 080-6112-6903
hiro2010shima@gmail.com



From the Alumni House

事務局からのお知らせ

★ 広告募集!

本誌では広告を募集しています。フルサイズ6万円、ハーフサイズ3万円です。ご興味のある方は、詳細を事務局までお問合せください

★ 原稿をお寄せください!

期会、リユニオンなどの案内・報告をお寄せください。本誌およびWebサイトに掲載いたします。

★ 住所変更について

住所・勤務先・氏名の変更の際はメールまたは同窓会のWebサイトの住所変更から、ご一報ください。

aaoffice@icualumni.com

携帯の方はこちらからどうぞ:



地方・海外にご転勤の際には支部をご紹介いたします。同窓会事務局までお問合せください。

★ ご協力をお願いします

大学の宣伝=大学への支援という考え方から、同窓生の著作、雑誌インタビューなどには、略歴欄に「国際基督教大学卒業」とお入れいただけますよう、お願い申し上げます。

★ 同期会やリユニオンのご相談は...

同期への連絡、学内の施設予約、ケータリング関連の情報提供など、同窓会事務局がサポートします(一部有料)。久しぶりにキャンパスで集いたいという気持ちが芽生えたら、お気軽にメールでご連絡ください。

aaoffice@icualumni.com

アラムナイニュース電子版のお申込み 同窓会メールマガジン配信先のご登録

- 1) アラムナイニュースの電子版配信をご希望の方は、下記フォームからご登録をお願いいたします。ご登録いただきますと、郵送でのお届けは行わずにメールで電子版をご案内いたします。
- 2) 2023年1月から、ICU同窓会員向けにメールマガジンによる情報発信を始めました。メールマガジンが届いていない方は、メールアドレスのご登録がないか、古いアドレスが登録されている可能性があります。ぜひこの機会に、下記フォームから最新のメールアドレスのご登録をお願いいたします。登録はこちらのフォームからお願いします。(住所変更と共通のフォームです)
https://www.icualumni.com/to_alumni/register/



— DAY賞候補者をご推薦ください —

Distinguished Alumni of the Year (DAY) 賞は、国際基督教大学に在籍したことのある方(卒業生・留学生・教職員。ただし故人は対象外)の中から、大学および同窓会の知名度・魅力度を高めることに貢献した方に対し、その功績を称えるために贈呈されます。皆様からのご推薦をお待ち申し上げております。

- ※ 自薦・他薦を問いません。
- ※ 推薦は年間を通して受け付け、毎年10月15日受け付け分までを選考対象として翌3月の桜祭りで受賞者を表彰します。
- ※ 受賞者は同窓会ウェブサイトおよびアラムナイニュースで発表されます。
- ※ 推薦および選考の過程については公開されません。
- ※ 歴代の受賞者は、ウェブサイトをご覧ください。

推薦方法 いずれかの方法でご推薦ください

- 1) 同窓会ウェブサイト「DAY賞」のページ[推薦フォーム]をご利用ください。
<https://www.icualumni.com/activities/day/>
- 2) 同ページより[推薦用紙PDF]をダウンロードし、必要事項をご記入の上ICU同窓会事務局あてに郵送またはFAXでお送りください。
- 3) メールに以下の必要事項を記載してICU同窓会事務局宛にお送りください。
 - ① 推薦したい方の氏名
 - ② 推薦したい方の卒業年あるいは在籍年(分かる範囲で)
 - ③ 推薦理由: 新聞記事などの客観的資料があればあわせてお送りください。
 - ④ あなた(推薦者)の氏名、卒業年または学生ID、住所、電話番号、メールアドレス

ICU同窓会事務局 〒181-8585 東京都三鷹市大沢3-10-2

TEL&FAX: 0422-33-3320 E-mail: aaoffice@icualumni.com



「アラムナイ・カフェ」～ICU祭に同窓会が参加します～

ICU祭の季節がやって参りました。

今年は10月13日(日)と14日(月・祝)に開催されます。

同窓会ではアラムナイ・カフェを開きます。懐かしいICUの緑を眺めながら、くつろぎのひとときをお過ごしください。

また、ICU祭実行委員会のテントで、在学生により同窓会グッズが販売されます。こちらもどうぞご利用ください。

「アラムナイ・カフェ」 アラムナイハウス2階ラウンジにて

10月13日(日)、14日(月・祝) 両日とも11:00～16:00(予定)

最新情報は右のQRコードより同窓会ウェブサイトをご覧ください。



寄付者御芳名 Donors

齋藤顯一 (17)

LA 会支部

貴重なご寄付を賜り、誠にありがとうございます。

たずね人 Missing

池田英人 (35 ID91)

深見淳 (43 ID99)

田中智己 (49 ID05)

小山英恵 (55 ID11)

市村脩一郎 (57 ID13)

野邊大樹 (61 ID17)

鳴島歳紀 (63 ID19)

動静をご存知の方は事務局までご一報ください。

訃報 Obituary

山本(旧姓:北山) 雅子 (6)

佐柳(旧姓:森) 光代 (9)

根本和泰 (GSE1969)

星野(旧姓:和佐田) 幸子 (28 ID84)

四方麻紀子 (39 ID95)

心よりお悔やみ申し上げます。

あなたもグループICU展に参加しませんか

第18回 グループICU展

Group International Christian University Exhibition

2025年2月2日(日)～2月8日(土)

東京交通会館 2Fギャラリー (JR有楽町駅前)

〒100-0006 東京都千代田区有楽町2丁目10-1



国際基督教大学(ICU)同窓生による絵画・書道・写真・陶芸・能面など多彩な作品展示を通して、同窓生とのリユニオンやさらにその枠を超えての出会い・対話・交流の場を提供します

あなたもご自分の作品を展示してみませんか? あなたの予想もしなかった反響がきっとあるはず。ご興味のある方はぜひ下記までお問い合わせください

越智 直樹 (12期) 080-5042-8001 ; n.ochi@jcom.home.ne.jp

島 博 (13期) 080-6112-6903 ; hiro2010shima@gmail.com

STAFF

EDITOR IN CHIEF

長谷川由紀 HASEGAWA, Yuki (32 ID88)

MANAGING EDITOR

松田真理子 MATSUDA, Mariko (38 ID94)

EDITORS

望月厚志 MOCHIZUKI, Atsushi (26 ID82)

新村敏雄 SHINMURA, Toshio (27 ID83)

磯島 大 ISOJIMA, Hiroshi (34 ID90)

太田順子 OOTA, Junko (35 ID91)

谷澤 聡 TANIZAWA, Satoshi (54 ID10)

川島美菜 KAWASHIMA, Mina (58 ID14)

滝沢貴大 TAKIZAWA, Takahiro (62 ID18)

Benjamin Delfs (ID15)

ART DIRECTOR

佐野久美子 SANO, Kumiko (44 ID00)

PRINTING DIRECTOR

坂井 健 SAKAI, Takeshi (小宮山印刷)

SECRETARY GENERAL

池島広子 IKESHIMA, Hiroko (27 ID83)

PUBLISHER

廣岡敏行 HIROOKA, Toshiyuki (31 ID87)

cover photo: 磯島 大

backcover photo: 同上

ご意見・ご感想をお気軽に

アラムナイニュースは、同窓生のみならずみなさまのために制作しているものです。今後の制作の参考にしますので、ご意見・ご感想、企画や人物の紹介等がある方は、メールにてお気軽に事務局までお知らせください。

アラムナイニュース編集部員募集

あなたの経験をANに活かしてみませんか？企画、取材、執筆、撮影、編集進行等を一緒にやって頂ける方を大募集中です。もちろん未経験でも可。最初は一緒に取材などを行いながら編集のプロから直接技術を学べますし、3年ぐらいやれば、一通り編集の基本が身に付きます。もちろん、現役の学生さんも大歓迎です。興味のある方は、同窓会事務局へメールでご連絡ください。

aaoffice@icualumni.com

■大学・同窓会に関する情報が満載です。

ぜひ一度ご覧ください。

同窓会Webサイト

<https://www.icualumni.com/>

同窓会 Facebook

<https://www.facebook.com/icualumniassociation>

X (旧 Twitter) @icualumni

大学 Web サイト <https://www.icu.ac.jp/>

JICUFWeb サイト <https://www.jicuf.org/>

■ ICU 同窓会事務局

〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2

TEL&FAX : 0422-33-3320

Email : aaoffice@icualumni.com

481

